宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第25集

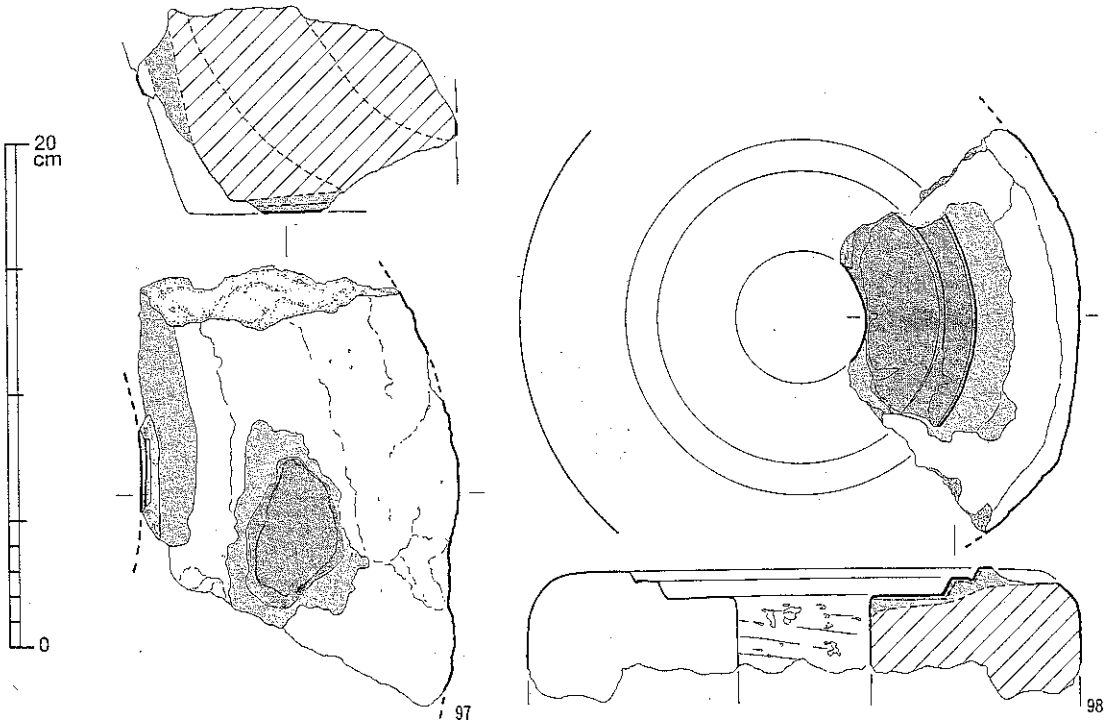
1994

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第25集

正誤表

①	P3	8行目	12月27日	平成16年1月4日
②	P4	20行目	長辺1m、短辺1．3m	長辺1．3m、短辺1m
③	P13	16行目	11月12日	11月11日
④	P24	7行目	土壙の南東部	土壙の南西部
⑤	P34	2行目	半球状土製品	半球形土製品
⑥	P35	第44図中のスクリーントーンの有無	下図参照	
⑦	P38	18行目	きのこ状土製品	きのこ形土製品
⑧		22行目	(117～122)	(115～122)
⑨		23行目	三叉状土製品	三叉形土製品
⑩	P39	図版キャプション	第47図　きのこ形土製品・三叉形土製品・半球状土製品	第47図　きのこ形土製品・三叉形土製品・半球形土製品
⑪	P46	上段キャプション	第59図　炉壁3	第59図　鉄滓
⑫		下段キャプション	第60図　鉄滓	第60図　炉壁3



第44図　鋳型実測図1

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第25集

1994

宇治市教育委員会

序

近年宇治市では、宅地開発があいつぎ、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加しています。

本書は宇治市教育委員会が平成５年度に行いました、開発事業にともなう緊急発掘調査の概要をまとめたものです。

平成５年度に行いました緊急発掘調査は５件です。その中で旦椋遺跡においては、中世の鋳造遺構を検出し、鋳造炉の底の部分が完全な形で出土しました。これは全国的にも出土例の少ないものと聞いております。また、野神遺跡では中世の墓を検出しました。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力をいただきました開発事業者の方々をはじめ、調査期間中にご協力を頂きました各機関・各位に心よりお礼申し上げます。

平成６年３月

宇治市教育委員会

教育長　岩　本　昭　造

例　言

1．本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第25集である。

2．本書が収録する調査は、平成５年度に本市教育委員会が実施した下記の緊急発掘調査である。

番号	遺跡名称	調査地	調査原因	経費負担者	調査期間	調査面積
1	丸山古墳	宇治琵琶16他	共同住宅建設	ユニチカ株式会社	平成５年４月	78㎡
2	野神遺跡	宇治野神66	社員寮建設	月桂冠株式会社	平成５年11月～６年１月	300㎡
3	金草原遺跡	木幡金草原16-1	共同住宅建設	大石富貴子	平成５年12月	200㎡
4	矢落遺跡	宇治矢落14他	共同住宅建設	株式会社大京大阪支店	平成６年１月～３月	324㎡
5	旦椋遺跡	大久保町山ノ内19-1	診療所建設	みんなの診療所をつくる会	平成５年８月～11月	430㎡

3．本書が収録する発掘調査組織は下記のとおりである。

調査主体者　宇治市教育委員会

調査責任者	宇治市教育委員会	教育長		岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課	主事	杉本　宏
	同		主事	荒川　史
調査事務局	同	参事		池田正彦
	同	社会教育課	課長	堀井健一
	同		文化財保護係長	吉水利明
	同		主任	山本敦子

調査参加者　新井朋哉・今西礼子・久保千恵子・佐野和恵・志村みどり・吹田直子・瀬古正志・時実奈歩・西村恵祥・福島孝行・宮川千代実

4．本書で使用する写真は、遺構写真は宇治市教育委員会が撮影したものを使用し、遺物写真は寿福滋氏が撮影した。また空中写真は㈱日開調査設計コンサルタントが撮影した。

5．本書の編集は宇治市教育委員会が行い、執筆はＶ－３を吹田が、その他を荒川が行った。

目　　次

Ⅰ．宇治丸山古墳発掘調査概要

1．はじめに…… 1

2．調査の概要…… 1

3．まとめ…… 2

Ⅱ．野神遺跡第１次発掘調査概要

1．はじめに…… 3

2．調査の概要…… 3

3．まとめ…… 4

Ⅲ．金草原遺跡発掘調査概要

1．はじめに…… 6

2．調査の概要…… 6

3．まとめ…… 7

Ⅳ．矢落遺跡第４次発掘調査概要

1．はじめに…… 8

2．調査の概要……10

3．まとめ……10

Ⅴ．旦椋遺跡第３次発掘調査概要

1．はじめに……12

2．遺　構……14

3．出土遺物……25

4．まとめ……47

挿 図 目 次

Ⅰ．宇治丸山古墳発掘調査概要

第１図　宇治丸山古墳調査地位置図…… 1
第２図　トレンチ配置図…… 2

Ⅱ．野神遺跡第１次発掘調査概要

第３図　野神遺跡調査地位置図…… 3
第４図　トレンチ平面図…… 4
第５図　中世墓出土鉄刀実測図…… 4
第６図　調査地全景（南西から）…… 5
第７図　SK03全景（南から）…… 5

Ⅲ．金草原遺跡発掘調査概要

第８図　金草原遺跡調査地位置図…… 6
第９図　１トレンチ全景（南西から）…… 7
第10図　２トレンチ全景（南西から）…… 7

Ⅳ．矢落遺跡第４次発掘調査概要

第11図　矢落遺跡調査地位置図…… 8
第12図　１トレンチ実測図…… 9
第13図　１トレンチ土層柱状図…… 9
第14図　２トレンチ実測図…… 10
第15図　出土遺物実測図…… 10
第16図　１トレンチ全景（北東から）…… 11
第17図　２トレンチ全景（西から）…… 11
第18図　１トレンチ溝検出状況（南東から）…… 11

Ⅴ．旦椋遺跡第３次発掘調査概要

第19図　旦椋遺跡調査地位置図…… 12
第20図　第１次調査の状況…… 13
第21図　調査地全景（西から）…… 14
第22図　調査地全景…… 15
第23図　トレンチ実測図…… 17
第24図　トレンチ東部平面実測図…… 18

第25図　トレンチ東部SX09・SD02付近断面図……19
第26図　遺物出土状況（上：SX10　下：SX09）……19
第27図　SX05実測図……20
第28図　SX10とSD02・03・SX09（西から）……20
第29図　SX01·02実測図……21
第30図　SX01掘削状況（上：西から、中：南から、下：南から）……22
第31図　SK01・SX07実測図……23
第32図　トレンチ中・西部全景（西から）……24
第33図　馬形埴輪実測図……25
第34図　SD05出土土器……26
第35図　SD05出土土器実測図……27
第36図　出土土器1……28
第37図　出土土器実測図1……29
第38図　SD02・SD03・SD04・SD09出土土器実測図……31
第39図　出土土器実測図2……32
第40図　出土土器2……32
第41図　出土土器実測図3……33
第42図　鋳型概念図……34
第43図　鋳型1……34
第44図　鋳型実測図1……35
第45図　鋳型2……36
第46図　鋳型実測図2……37
第47図　きのこ形土製品・三叉形土製品・半球状土製品・取瓶実測図……39
第48図　きのこ形土製品……40
第49図　三叉形土製品……40
第50図　半球形土製品・取瓶1……41
第51図　半球形土製品・取瓶2……41
第52図　方形土製品実測図……42
第53図　フイゴ羽口実測図……42
第54図　方形土製品……43
第55図　フイゴ羽口……43
第56図　炉壁実測図……44

第57図　炉壁 1 …… 45
第58図　炉壁 2 …… 45
第59図　炉壁 3 …… 46
第60図　鉄滓 …… 46

Ⅰ．宇治丸山古墳発掘調査概要

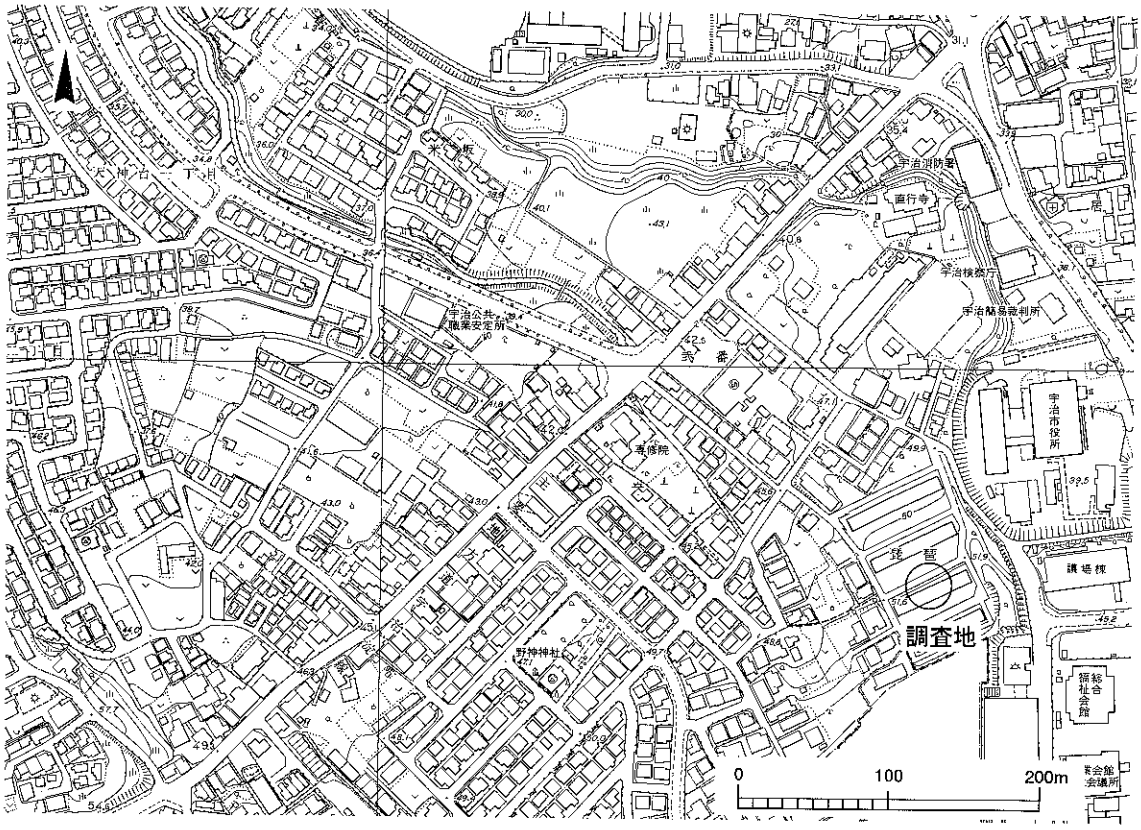
1．はじめに

宇治丸山古墳は、宇治市役所背後の丘陵上にかつて存在した前方後円墳である。大正12年に出された報告（梅原末治「宇治町丸山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊）によれば、全長約37ｍで、後円部に粘土槨を持つ。粘土槨内からは仿製変形四獣鏡・鉄剣・鉄刀・鉄斧・鉄鏃等が出土している。この他土器も出土しているが、土師質のものと陶質のものがあったという。古墳はその後完全に削平され、明確な位置もわからなくなっている。

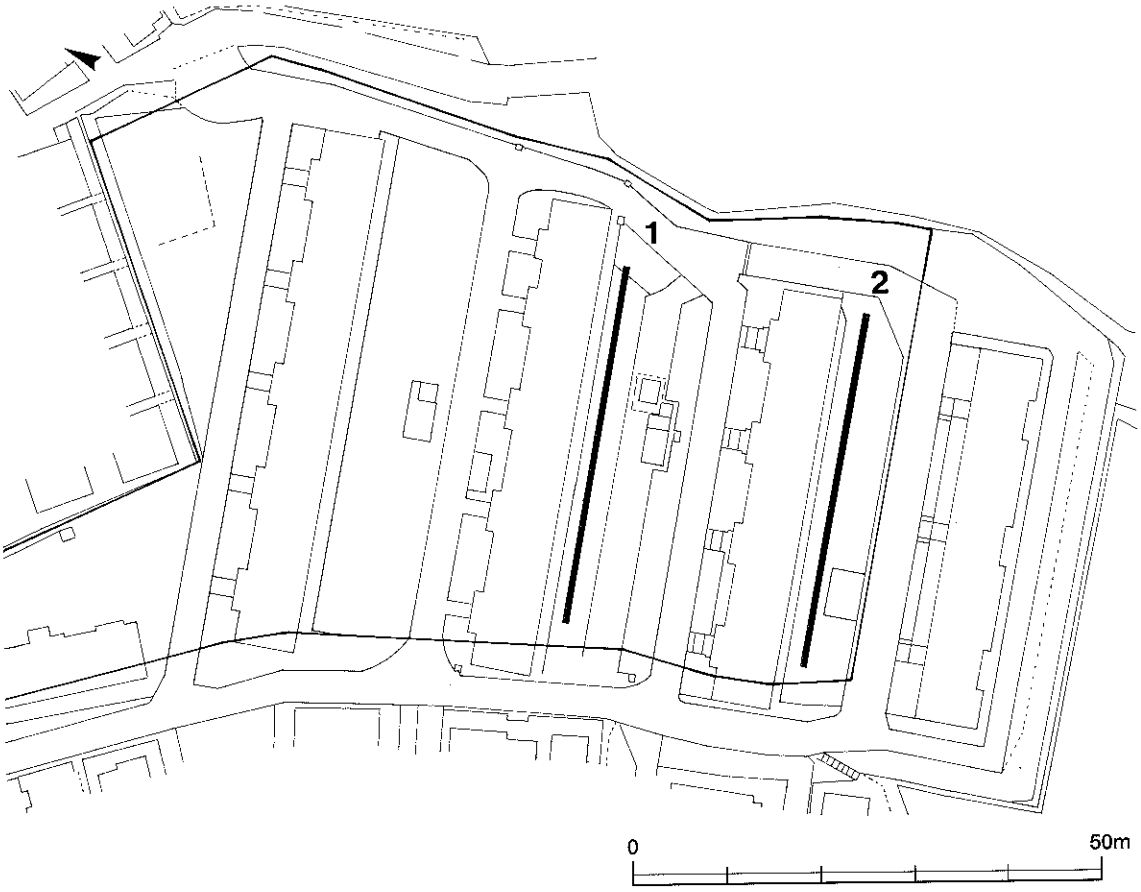
平成元年度、市役所背後に丸山古墳残丘と伝えられる高まりがあり、その部分を造成する工事が宇治市によって行われ、その事前調査が行われた。調査の結果、中・近世の遺物は出土したものの、古墳に関係する遺構・遺物は全く検出しなかったため、この高まりは自然地形と判断された。

2．調査の概要

今回の調査は、丸山古墳が存在した丘陵上に、ユニチカ株式会社による共同住宅の建設が計画され、その事前調査として実施したものである。調査地の現状はユニチカ株式会社の鉄



第１図　宇治丸山古墳調査地位置図



第２図　トレンチ配置図

筋コンクリート造りの社員寮が建設されており、すでに大規模な造成が行われている可能性が高かったが、古墳の周溝が遺存している可能性も考えられたため、調査を実施した。

調査の段階では、３棟の既存建物があったため、建物の間の空閑地に２本のトレンチを設定した。いずれも幅は約１ｍで、長さは38ｍと39ｍである。調査の結果、表土直下で地山の黄褐色粘土層を検出し、いずれのトレンチも遺構・遺物は検出しなかった。

３．ま と め

今回の調査では、丸山古墳に関する遺構・遺物は検出しなかった。この調査結果から判断すると、丸山古墳が調査地点に存在していなかったか、もしくは社員寮建設時の造成によって完全に消滅したかのいずれかであろう。

Ⅱ．野神遺跡第１次発掘調査概要

１．はじめに

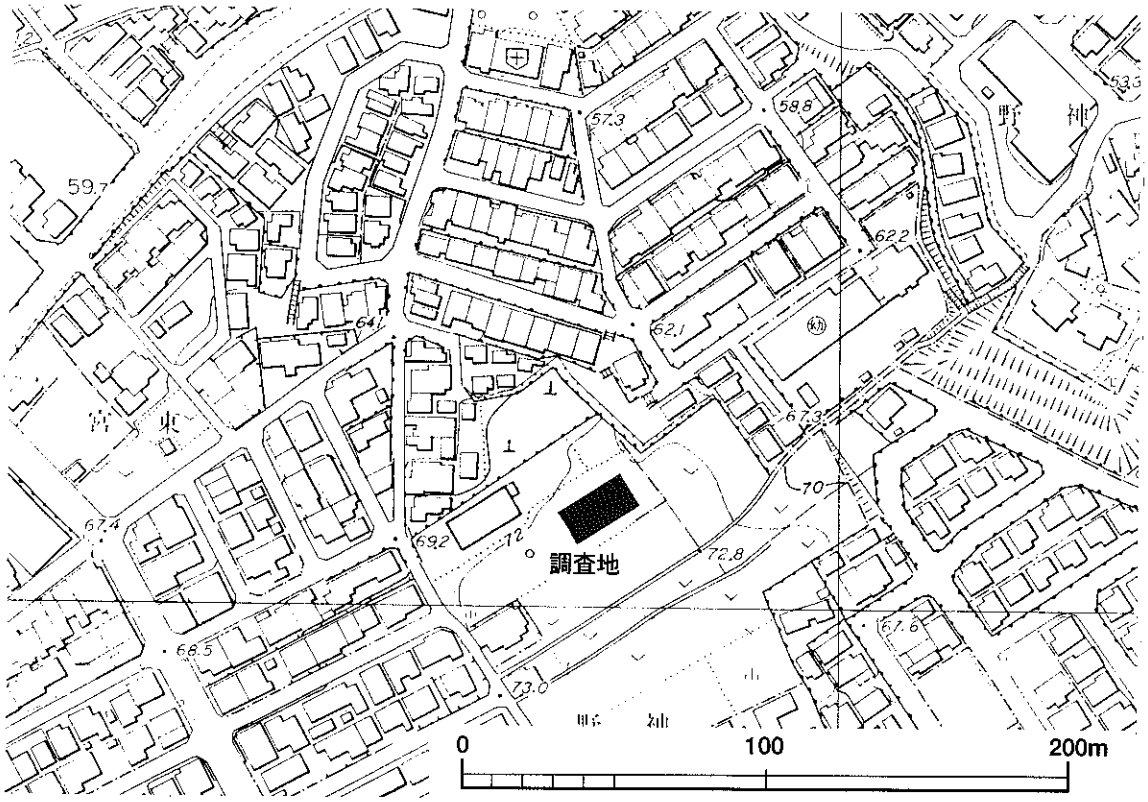
野神遺跡は、現在の宇治市街地の西側に位置し、市街地を望む丘陵上にある。本調査地南側の畑からは石鏃・磨製石剣・弥生土器・青磁などが採集されており、弥生時代～中世の遺跡として報告されている（山田良三「京都府宇治丘陵出土の石鏃」『古代学研究』58、1970）。

本調査地は、調査前の段階では造園業者の育苗場として利用されていたが、月桂冠株式会社の社員寮が建設されることとなり発掘調査を実施することとなった。調査は、平成５年11月29日から12月27日まで行い、調査面積は300㎡である。

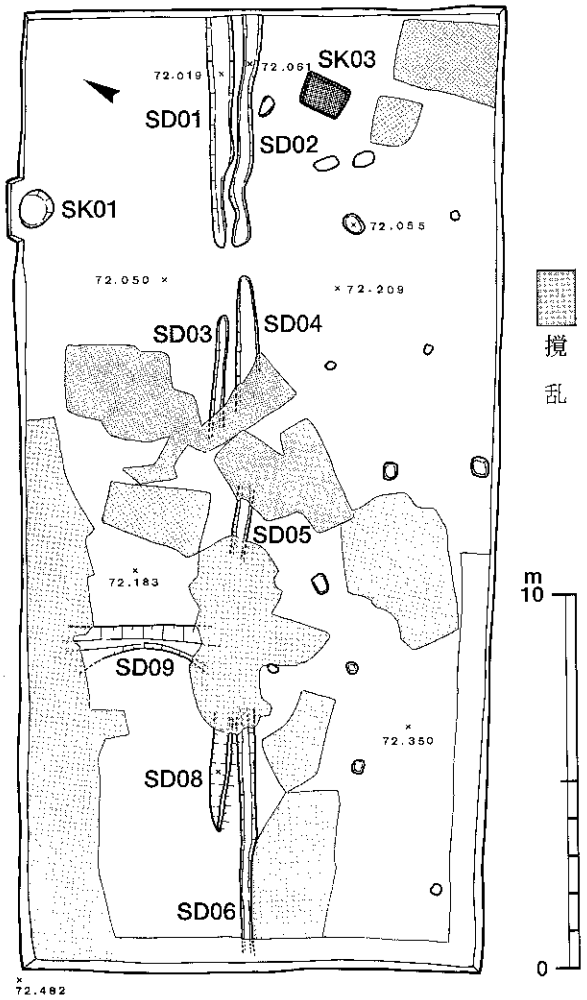
２．調査の概要

調査は建築が予定されている調査地東部に、12ｍ×25ｍのトレンチを設定して実施した。基本的な層位は、表土下層に①赤褐色粘土層、②暗赤褐色粘土層（地山）の２層があり、遺構は②層上面で検出した。

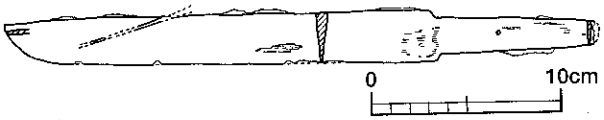
調査地の調査前の状況は、ほぼ平坦な土地となっていたが、当地は丘陵の縁辺部にあたり、本来は東に向かって傾斜する地形であったようである。このためトレンチ西部については遺



第３図　野神遺跡調査地位置図



第４図　トレンチ平面図



第５図　中世墓出土鉄刀実測図

構が削平を受けた状態で検出した。さらに苗木の植え替えによる攪乱が各所で見られたため、時期や性格を明確にし得た遺構は少ない。検出した遺構には、溝・土壙・ピットがある。

溝 SD01・02・03・04・05・06・07・08　トレンチ中央部の東西溝である。調査段階では、攪乱などによって途切れて検出したため、別の遺構番号を付したが、基本的には平行する２本の溝と考えられる。幅約0.3～0.7ｍ、深さ約0.1～0.2ｍ。

溝 SD09　トレンチ中央からやや西寄りにある南北溝である。SD01などと同様の機能を持つものか。幅約0.6～0.8ｍ、深さ約0.6ｍ。

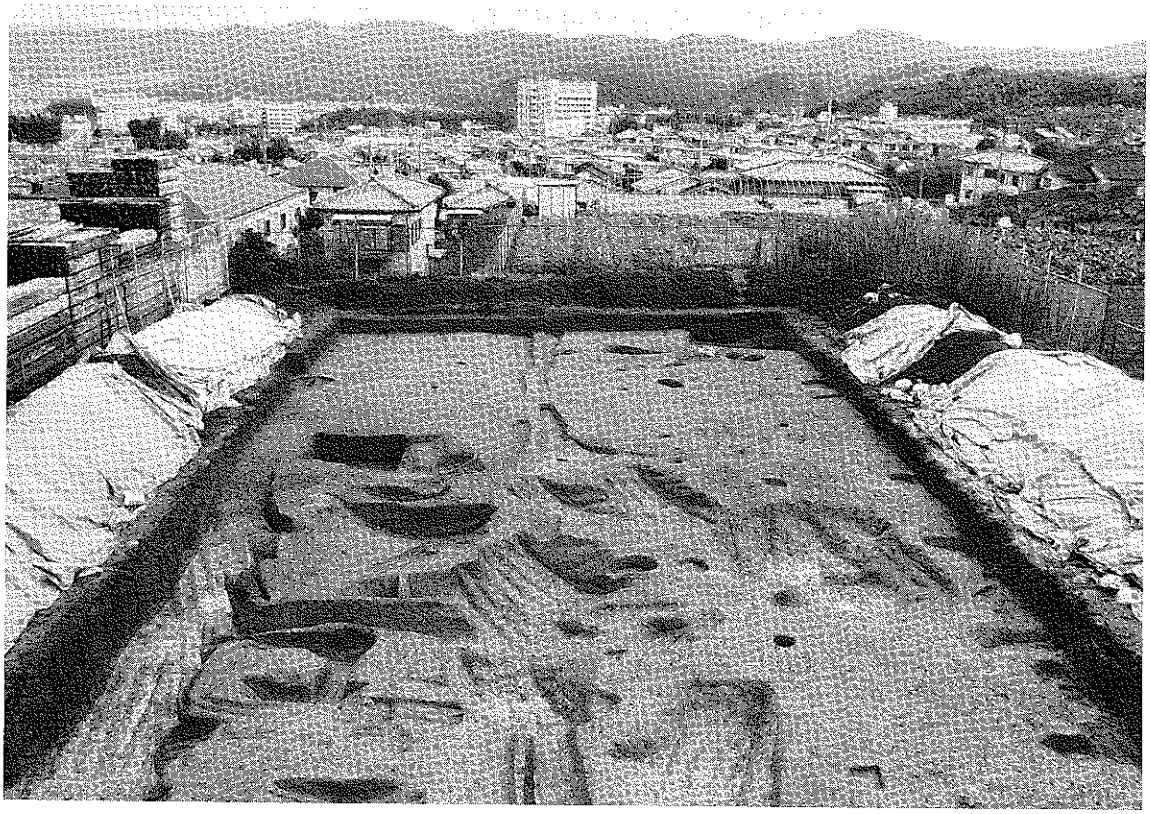
土壙 SK01　トレンチ北東部で検出した円形の焼土壙である。近世のものである。直径0.9ｍ、深さ0.1ｍ。

土壙 SK03　トレンチ東部で検出した方形の土壙である。長辺１ｍ、短辺1.3ｍ、深さ0.5ｍを測る。底面から鉄刀１点と鉄鏃１点が出土した。土器が出土していないため、明確な時期は不明であるが中世墓と考えられる。

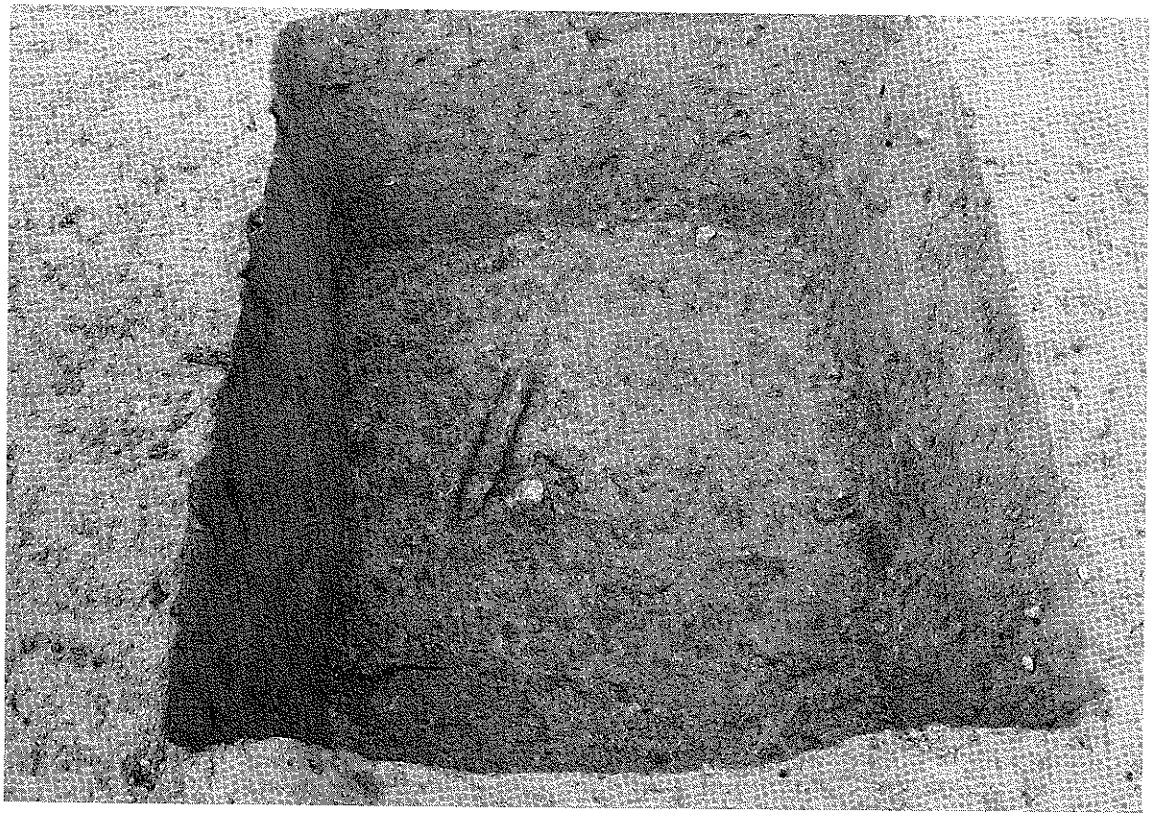
今回の調査で出土した遺物には、土師器・瓦器・鉄製品がある。このうち土器は包含層からの出土で、遺構に伴うものは鉄刀のみである。鉄刀（第５図）は、全長31.1㎝、刃部長22.9㎝、茎長8.2㎝。茎のほぼ中央に目釘穴を１つ持つ。身及び茎のいずれにも木質が付着しており、把・鞘とも装着していた可能性が高い。

３．ま と め

今回の調査では、周辺で知られている弥生時代の遺構・遺物は確認しなかったが、時期は不明ながら中世墓を検出した。当地は宇治市街を望む場所でもあり、宇治市街遺跡との関連も考えられるだろう。



第６図　調査地全景（南西から）



第７図　SK03全景（南から）

Ⅲ．金草原遺跡発掘調査概要

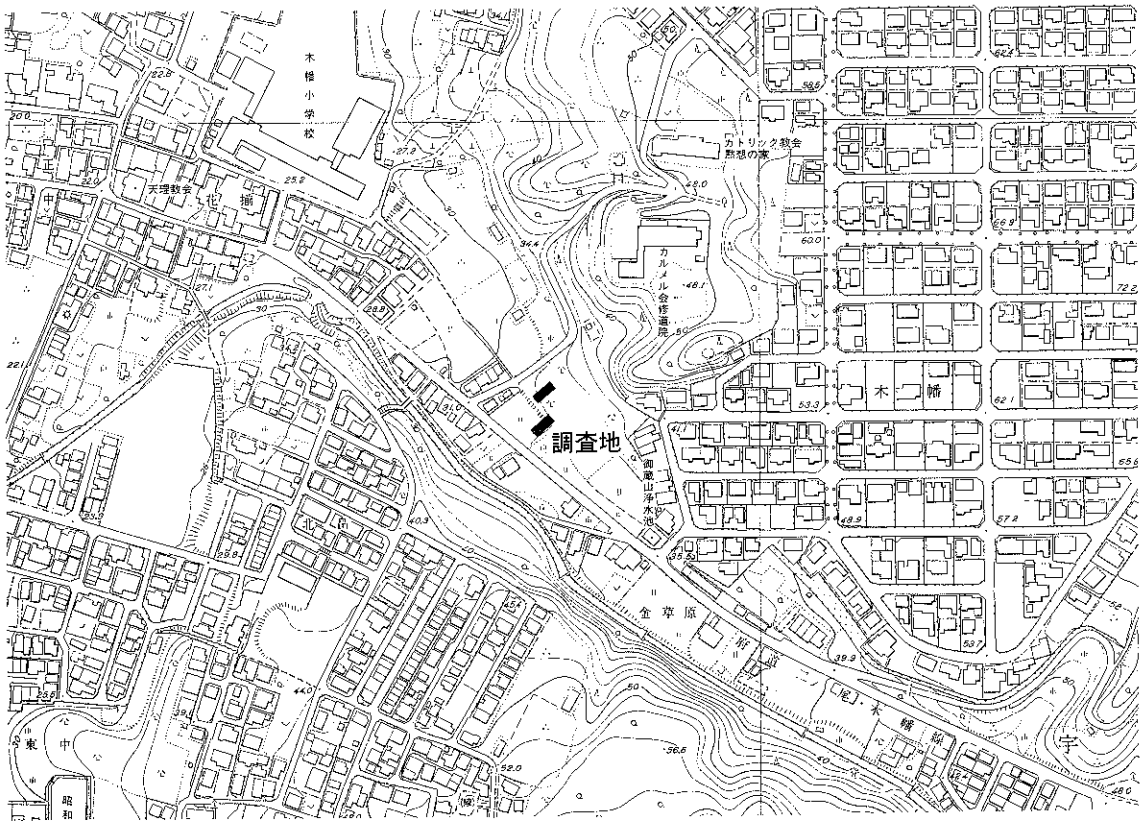
1．はじめに

金草原遺跡は、堂の川が開析した谷から中位の段丘上に流れ出す地点に位置している。遺跡の西に広がる段丘上には、藤原道長が創建した浄妙寺があり、この浄妙寺に関連すると思われる青磁の水注（京都国立博物館蔵、国指定重要文化財）が出土したことで知られている。また、浄妙寺の梵鐘を鋳造した場所とも伝えられており、「かなくさはら」の地名は「かなくそはら」から転化したものいわれている。さらに付近からは古墳時代の勾玉も採集されており、古墳が存在した可能性も考えられている。しかし、過去に発掘調査は行われておらず、前述した遺物が採集された正確な場所も明確ではない。

今回の調査は、木幡金草原16－１において共同住宅の建設が計画されたため、その事前調査として実施した。調査は平成５年12月６日から開始し、12月28日に終了した。調査面積は約200㎡である。

2．調査の概要

調査は、調査対象地に約15ｍ×６ｍの２ヶ所のトレンチを設定して行った。調査地が南に



第８図　金草原遺跡調査地位置図

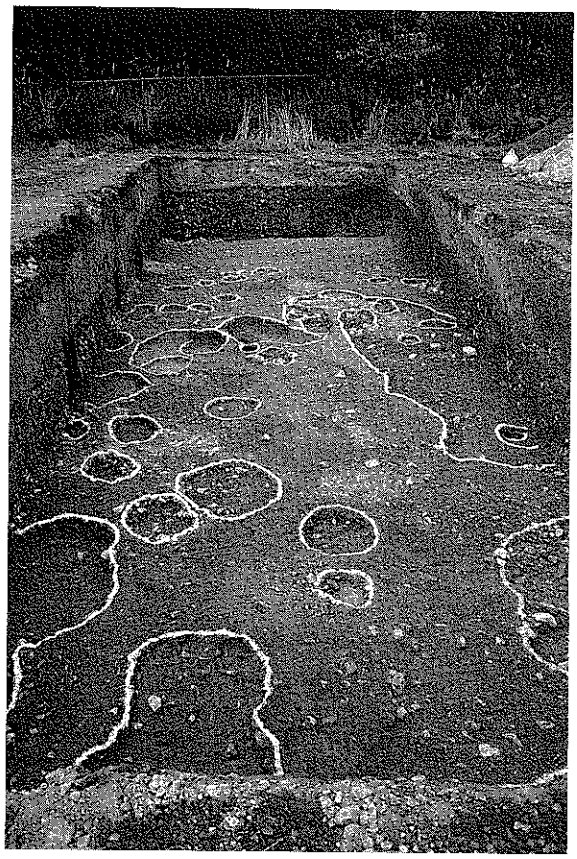
傾斜する斜面であるため、丘陵側であるトレンチ北端では地表下約1.5mで、南端では地表下約1.9mで地山と思われる茶褐色土を検出した。この間の土層は、①表土、②盛土である黄褐色土と③旧表土と思われる黒褐色土の3層である。

地山面では、不整形で皿状の底面の土壙やピットを多数検出しているが、これらは近代の耕作による掘り込みの痕跡と考えられる。これら以外の性格を特定できる遺構は検出していない。

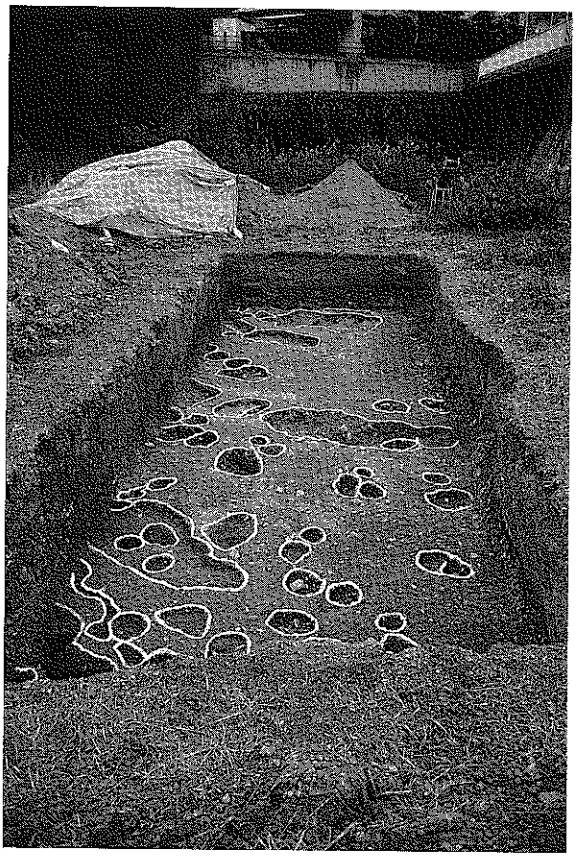
出土遺物としては、土師器があるが、細片であるため時期等は不明である。

3. まとめ

今回の調査では、性格の特定できる遺構は検出しなかった。昭和42年に行われた浄妙寺の発掘調査によれば、調査地の南側を流れている堂の川は、現在の流路より北側を流れていたことが明らかになっている。その位置から考えると、本調査地は旧流路の推定ラインに近接していることがわかる。しかし、検出した土層の状況から判断すると、今回のトレンチ内に流路があったとは考えられない。このことから今回の調査で遺構を検出しなかったのは、堂の川の氾濫した際に削られたものか、耕作等によって削平されたものと思われる。



第9図　1トレンチ全景(南西から)



第10図　2トレンチ全景(南西から)

Ⅳ．矢落遺跡第４次発掘調査概要

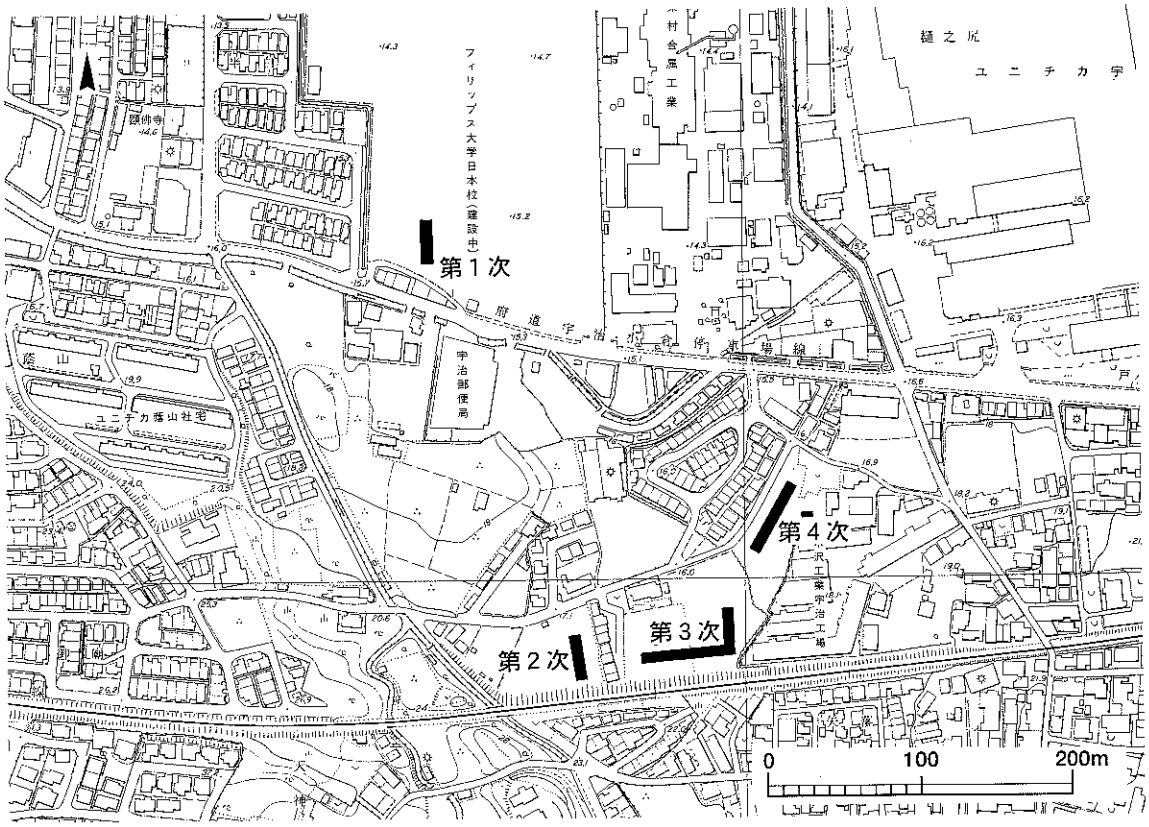
１．はじめに

現在の宇治市街地は、大部分が折居川の形成した扇状地上にあたっているが、その扇状地の西端は宇治川が形成した段丘まで届いておらず、扇状地と段丘の間は一見すると谷状の地形を形成している。矢落遺跡は、この谷状の地形を中心とした地域に広がる散布地である。本調査地は遺跡の東部、扇状地の西端部分にあたると思われる。矢落遺跡では過去に３回の発掘調査が実施されており、主に近世の土壙・溝・耕作溝・石垣などが検出されており、遺物としては主に中世の土器・陶器などが多い。

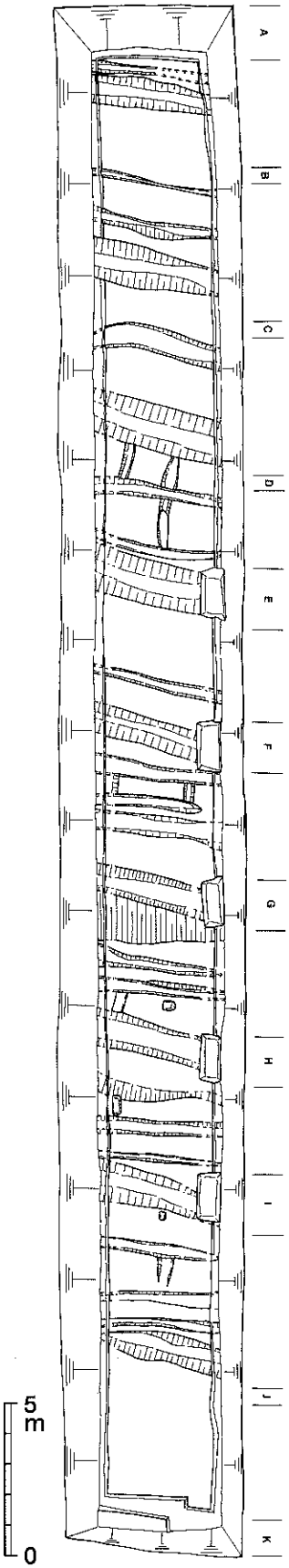
本調査は、宇治矢落14番地他において、株式会社大京大阪支店が計画した共同住宅建設に伴う事前調査として実施したものである。

調査は建物が計画されている地点に５ｍ×60ｍのトレンチを設定し、東側の一段高くなった地点に３ｍ×８ｍのトレンチを設定して実施した。調査の詳細については後述するが、近世の耕作に伴う溝群を検出し、その下層からは平安時代の軒瓦を検出した。

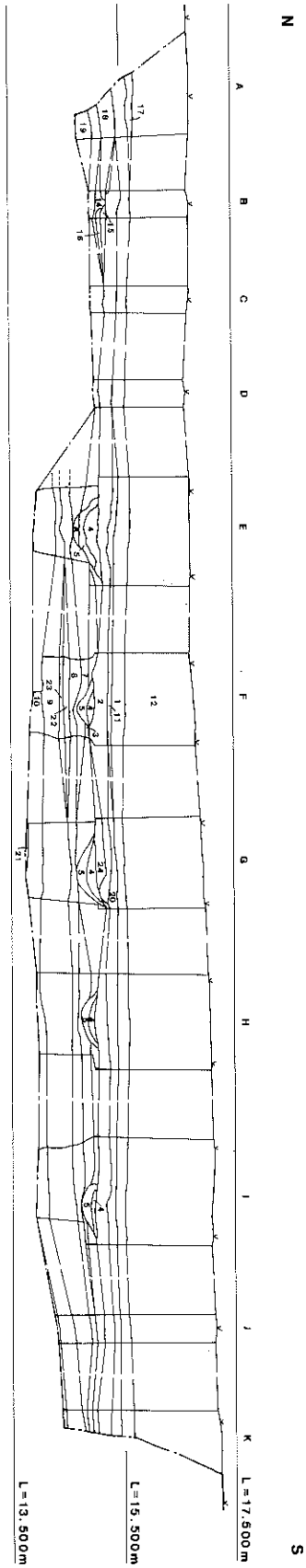
調査は平成６年１月24日から３月11日まで行い、調査面積は324㎡である。



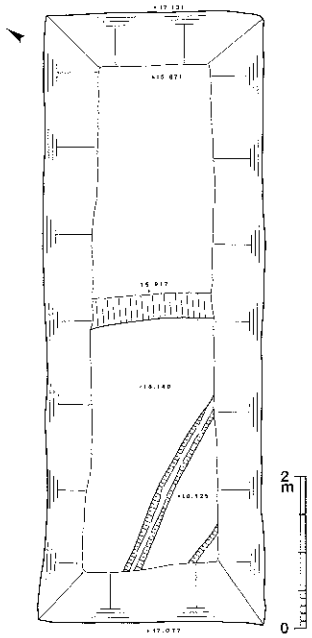
第11図　矢落遺跡調査地位置図



第12図　1トレンチ実測図



第13図　1トレンチ土層柱状図



第14図　２トレンチ実測図

２．調査の概要

調査地の基本的な層序は、地表下１～1.6ｍの厚さで現代の盛土があり、その下層に①黒褐色シルト層、②暗青灰色シルト層、③青灰色粘土層がある。今回の調査では、耕作に関連すると思われる溝群を検出しているが、これらは③層上面で検出している。この③層より下層は、⑦暗青灰色粘土層、⑧暗灰褐色砂礫層、⑨暗褐色シルト、⑩黒褐色シルトが堆積する。下層にいくに従って、有機質を多く含んだ堆積物となり、流れのない沼地状の様相を呈している。

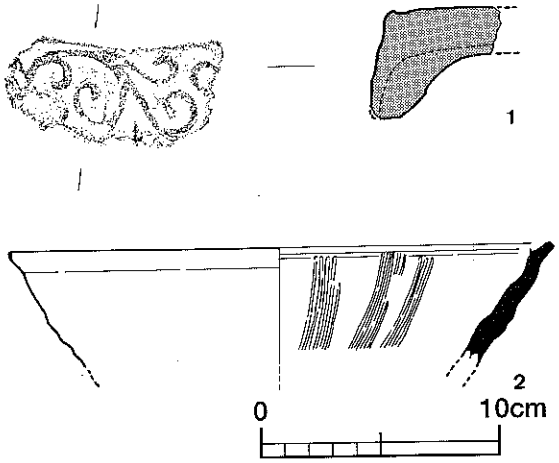
③層上面で検出した溝は、主に東西方向に平行して掘削されているが、幅80㎝前後、深さ50㎝前後の溝とそれより細くて浅い溝の２種類に分類できる。幅80㎝前後の溝は、ほぼ５ｍ間隔に掘られており、規則性が認められる。おそらく畑などの耕作に伴う溝と考えられる。時期は近世である。

前述した平安時代中期の軒平瓦は⑩層から出土している。地層の状況などから見て、遺構に伴うものではなく、周辺から移動したものであろう。中央官衙系のもので、栗栖野瓦屋・法勝寺下層・内膳町遺跡などで同笵の可能性のある瓦が出土している。

２トレンチでは、１トレンチと同様の溝を検出している。

３．ま と め

今回の調査では、近世の畑跡を検出した。当地は本来沼地状の低湿地であり、近世にいたって耕地化されたものと思われる。今回の調査で注目されるのは、平安時代の瓦が出土した点である。この瓦は付近から流れ込んだものと考えられるが、地形の状況から見て調査地の東もしくは南側に、平安時代の、瓦を使用した建物があったことが考えられる。調査地付近では、南東約150ｍのところに宇治神社の御旅所があったとされ、北方にあるユニチカ宇治工場の付近には藤原忠実の成楽院や四条宮寛子の居住していた泉殿があったと推測されている。これらの寺院や別業は、考古学的な調査によってまったく確認されていないが、今回の調査によってその可能性が高まったものと思われる。



第15図　出土遺物実測図

第16図　1トレンチ全景（北東から）

第17図　2トレンチ全景（西から）

第18図　1トレンチ溝検出状況（南東から）

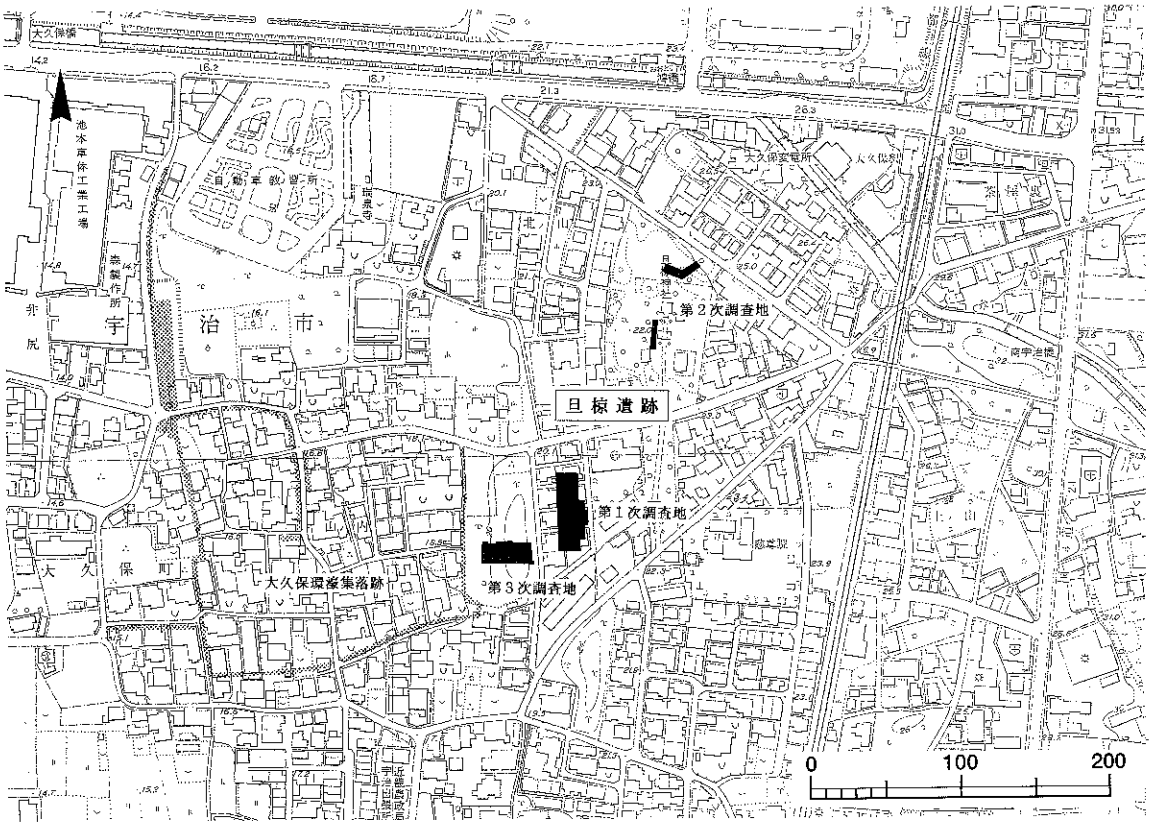
Ⅴ．旦椋遺跡第３次発掘調査概要

１．はじめに

本報告は、宇治市大久保町山ノ内19-1で実施した診療所建設に伴う旦椋遺跡第３次発掘調査の概要報告である。

旦椋遺跡は、宇治丘陵を源とする名木川が形成した扇状地上に位置する。この扇状地上ではあまり多くの遺跡は発見されていないが、東側の丘陵部は宇治市西部で最も遺跡の集中する地域となっており、庵寺山古墳・金比羅山古墳・坊主山古墳群などの前期から後期に至る首長墳や、白鳳寺院である広野廃寺、広野遺跡・一里山遺跡などの飛鳥時代から奈良時代の集落などが分布している。

旦椋遺跡付近は、昭和61年の遺跡地図改訂以来、大久保環濠集落遺跡として周知されていたが、平成３年度に実施した本調査地東側隣接地の調査（第１次調査）において古墳時代から奈良時代にかけての古墳や集落を検出し、中世の環濠集落とは異なる旦椋遺跡として認識されることとなった。この調査によって、旦椋遺跡が和名抄に記載される栗隈郷の中心的集落である可能性が考えられたため、平成４年度には旦椋神社境内において範囲確認のための

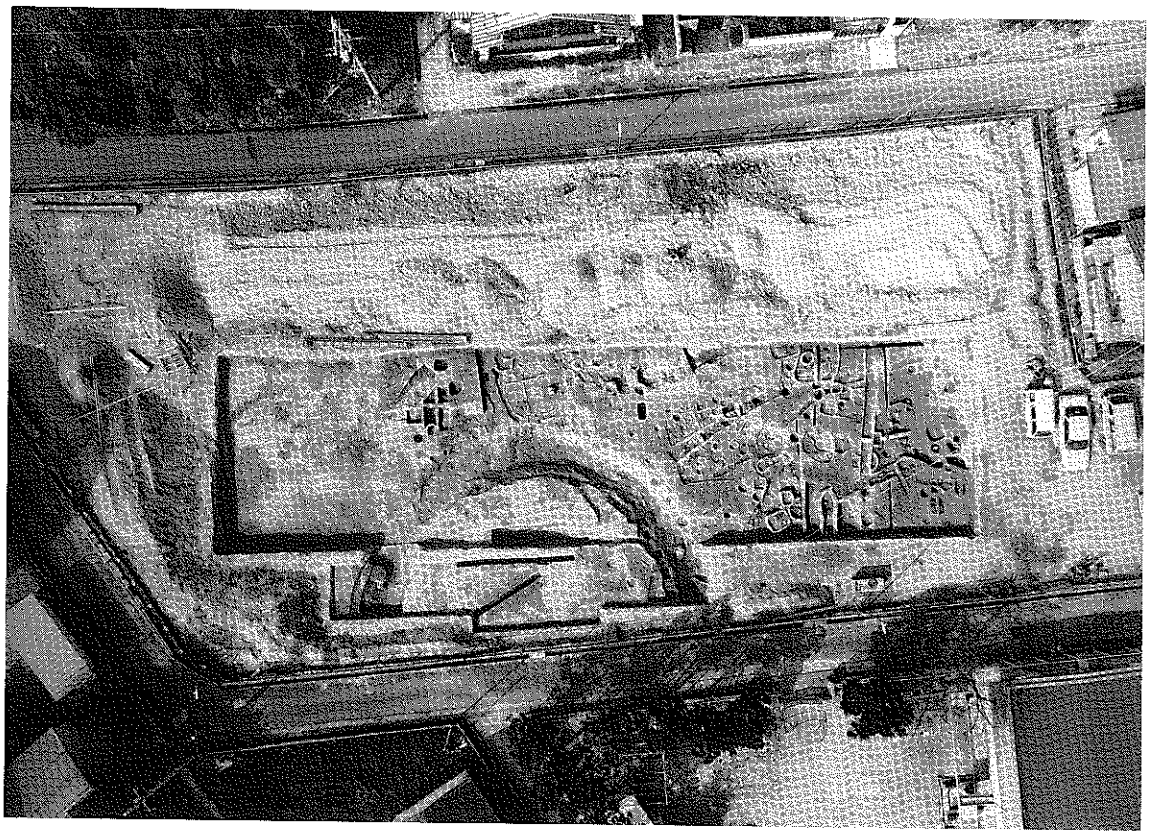


第19図　旦椋遺跡調査地位置図

調査を行った（第２次調査）[註1]。その結果、第１次調査地北側の旦椋神社境内まで遺跡が広がること、社殿が建てられている現在の地表の下層1.5ｍは洪水に起因すると考えられる砂層があり、その砂層の下に13世紀から16世紀の土師器が散布する面があることがわかった。

このように旦椋遺跡の重要性が徐々に明らかになってきた中で、第１次調査地とは道路を挟んで西側に隣接する地点で「みんなの診療所をつくる会」による診療所建設が計画された。調査地の西端には『宇治市史』において大久保環濠集落の東限と推定されている側溝がある。このため本調査地は大久保環濠集落外にあり、また第１次調査ではさらに東西に遺跡が広がる様相を呈していたことから、第１次調査と同様に古墳群や飛鳥～奈良時代の集落が検出されるものと想定した。

調査は平成５年８月30日に準備作業を行い、翌31日から重機掘削を開始した。ところが、古墳時代から奈良時代の遺構・遺物も存在するものの、それ以上に注目されたのが中世の鋳造関係遺構が存在したことであった。詳細は後述するが、トレンチ東部では大量の鉄滓や炉壁、鋳型片などが堆積しており、その下層から鋳造土壙や溝などの遺構を検出した。さらにＳＸ01では溶解炉の底部が完存しており、これについては京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏の指導と協力の下に、発泡ウレタンで炉底を保護し、取り上げを行った。11月６日には現地説明会を行い、11月12日に全ての作業を終了した。調査面積は430㎡である。



第20図　第１次調査の状況

２．遺　構

調査地は、東から西に向かって傾斜する緩斜面で、調査前の状況は竹林であった。標高はトレンチ東端で約20ｍ、西端で約19ｍである。調査はまず32ｍ×12ｍのトレンチを設定して掘削を行い、遺構の検出状況により部分的に拡張を行った。地区割は国土座標の座標軸に合わせ５ｍ方眼に区切り、南北軸をアルファベットで、東西軸を数字で標記した。

調査地の基本的な土層は、地表下0.7ｍまで竹の根によって形成された黒褐色土層で、遺構はこの層の下層で検出した。ただしトレンチ東部については、遺構面の上層に廃棄された鉄滓や炉壁・鋳型などが大量に堆積しており、トレンチ内でも異なる堆積状況を示していた。

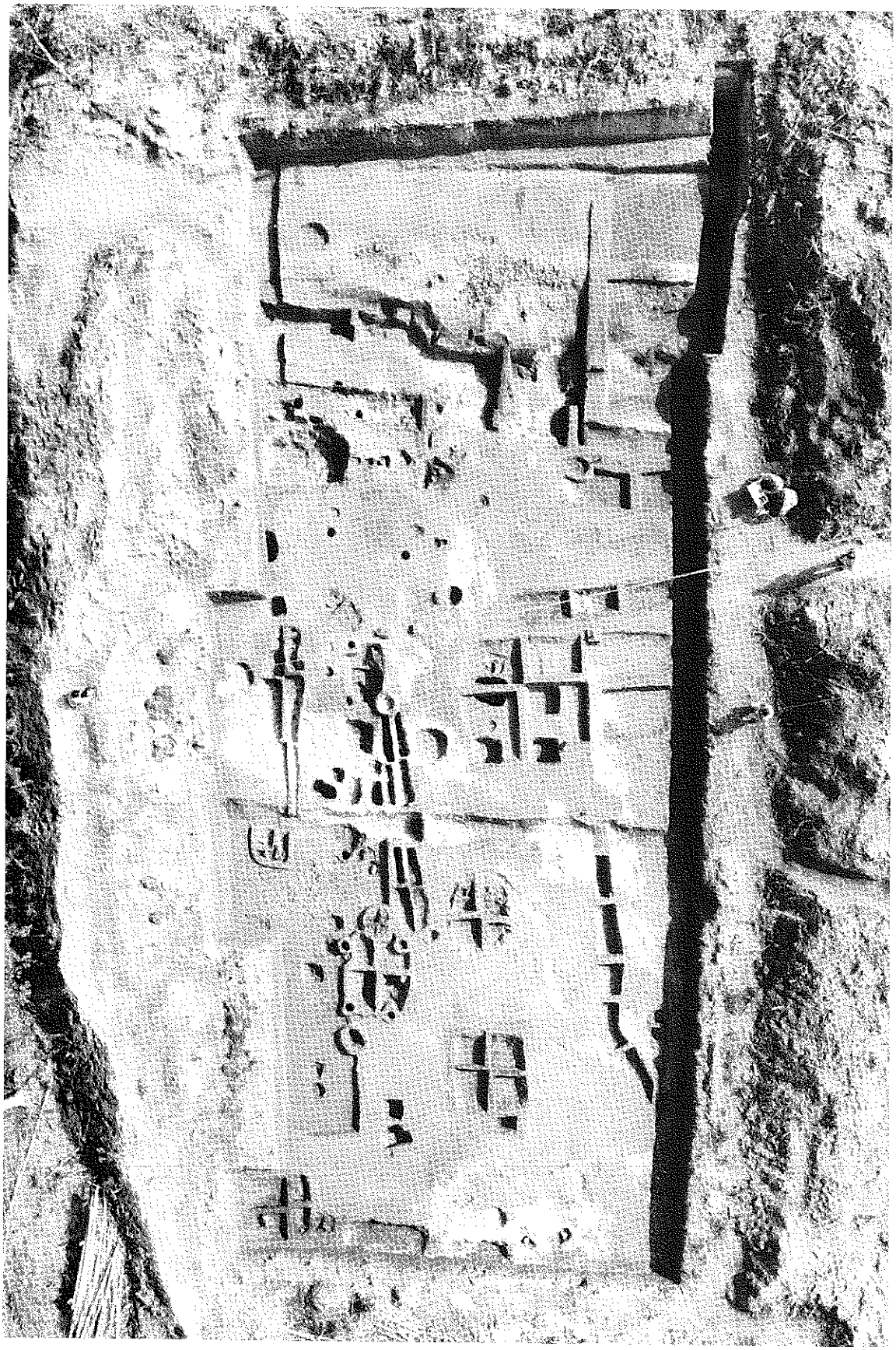
Ａ．古墳～奈良時代の遺構

古墳時代から奈良時代の遺構は、主に中世の遺構分布の希薄なＢ・Ｃ４・５区から検出している。ただし遺物はトレンチ全域から出土していることから、本来は広範に遺構があったものと思われるが、中世の遺構によって攪乱を受けたものと思われる。検出した遺構には、溝・土壙・ピットなどがあるが、性格を特定できる遺構は少ない。

溝 SD05　Ｂ・Ｃ５区で検出した南北溝。検出長4.6ｍ、幅0.8ｍ、深さ約0.2ｍを測る。ここからは主に古墳時代後期の土器及び埴輪が出土している。

土壙 SX08　Ｂ４区で検出した隅丸方形の土壙である。東西3.4ｍ、南北３ｍ、深さ0.15ｍを測る。底部は浅い皿状を呈する。

第21図　調査地全景（西から）



第22図　調査地全景

土壙 SK18・19・21・25　土壙 SX08を切って、方形に並んでいる土壙。いずれも方形で、一辺約0.8～0.9ｍを測る。

またＡ３区では、置きカマド・土師器の甕などの土器溜まりを検出している。

Ｂ．中世の遺構

中世の遺構は、概ね鋳造に関係する遺構である。しかしそれぞれの遺構の形態が多様であり、単一の製品を製作していたとは考えられないし、また作業内容も異なることが考えられる。これらの観点から検出遺構を検討してみると、大きく３つのブロックに分けられるのではないかと考える。それはトレンチ東部のブロックと、中央のブロック、そして西部のブロックである。なお、この区分は概念的なものであり、明確な線引きができるわけではない。

①東部ブロック（第24～28図）

トレンチ東部のブロックは、調査地の中で最も標高の高い地点にあたるが、ここでは平坦面とその西側の何本かの南北溝によって構成される。また、平坦面の東側も落ち込んでいく状況が窺え、平坦面の幅は２～4.5ｍ程度となる。このブロックは、鉄滓や炉壁などが集中して廃棄されていた場所であり、遺跡の中でもいち早く利用されなくなった可能性がある。

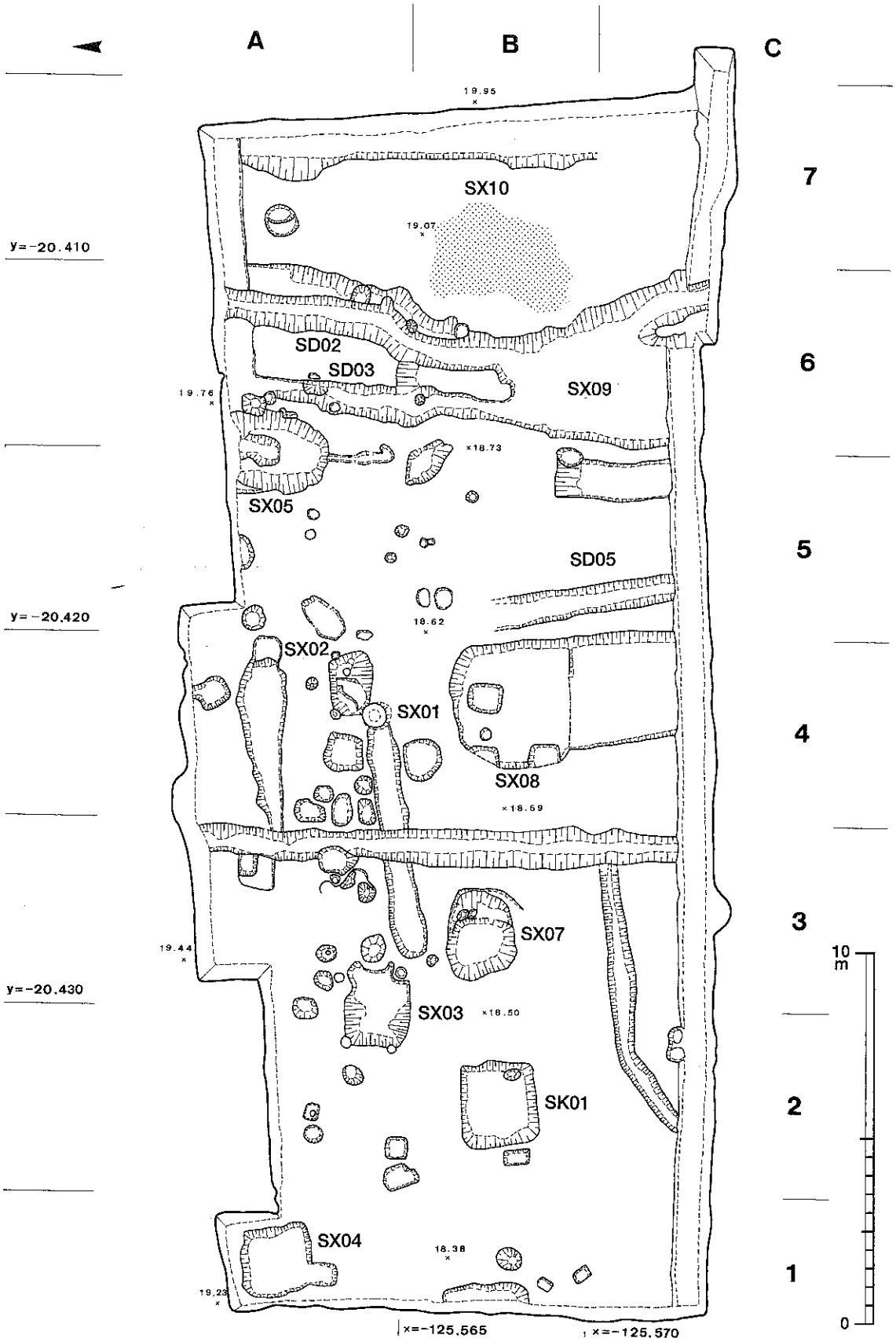
溝 SD02　Ａ６区からＢ６区にかけてある南北溝である。検出長約８ｍ、幅約１ｍ、深さ約0.6ｍを測る。トレンチ北端から約６ｍ南方に伸び、わずかに西に屈曲したあと、さらに屈曲しまた南方に伸び、平坦面が張り出すような形状をとる。溝の埋土には、炉壁や鉄滓・炭などが多量に含まれる。

溝 SD03　SD02の西側にある南北溝である。SD02にほぼ平行してあるが、ほぼ直線的である。幅約0.6～0.9ｍ、深さ0.2～0.4ｍを測る。

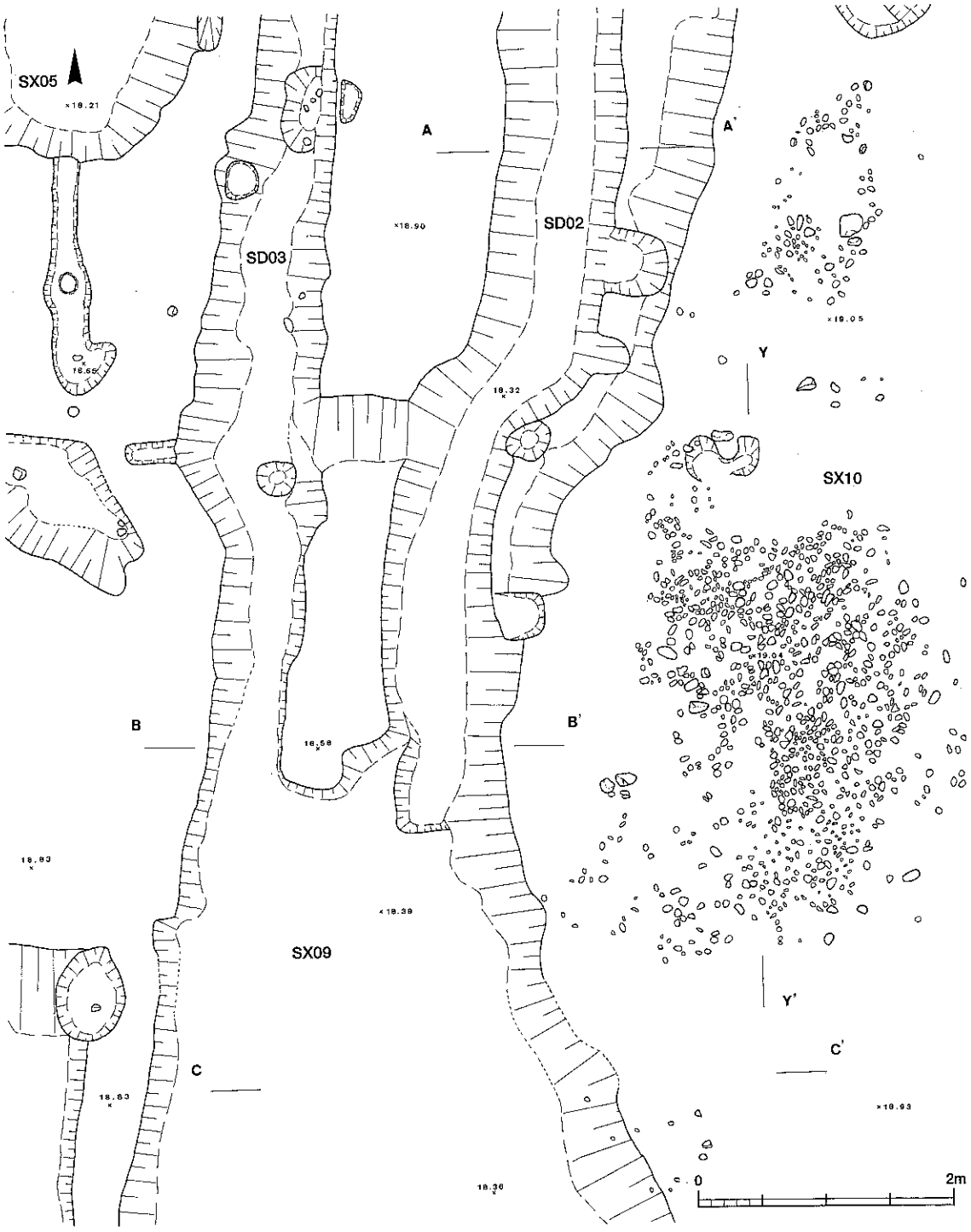
溝状遺構 SX09　SD02・03の南にあり、SD02・03は SX09につながっている。当初 SD02・03が切り合ったものと考えていたが、断面観察の結果、単に２本の溝の切り合いとは理解しにくいため、新たな遺構番号を付した。しかし、４本以上の溝の切り合いである可能性はある。遺構の幅は SD02の東側のラインと SD03の西側のラインを延長したものであるが、SX09の東側のラインは東に広がっており、SD02の屈曲部と対象をなしている。底面からは、大型の瓦質の鍋が出土している。

礫集積遺構 SX10　SD02と SX09によって形成された平坦面の張り出し部の中央にある遺構である。南北約３ｍ、東西約1.8ｍの範囲に小礫が集中している部分が認められる。明確な掘方は確認できなかったが、周囲より若干低い部分に礫があるため、掘り込んで礫を集積している可能性が高い。

土壙 SX05（第27図）　Ａ５・６区で検出した楕円形の土壙。土壙の北端はトレンチ外に伸びているため、全形は明らかでない。長軸の検出長2.5ｍ、短軸2.1ｍ、深さは0.65ｍを測



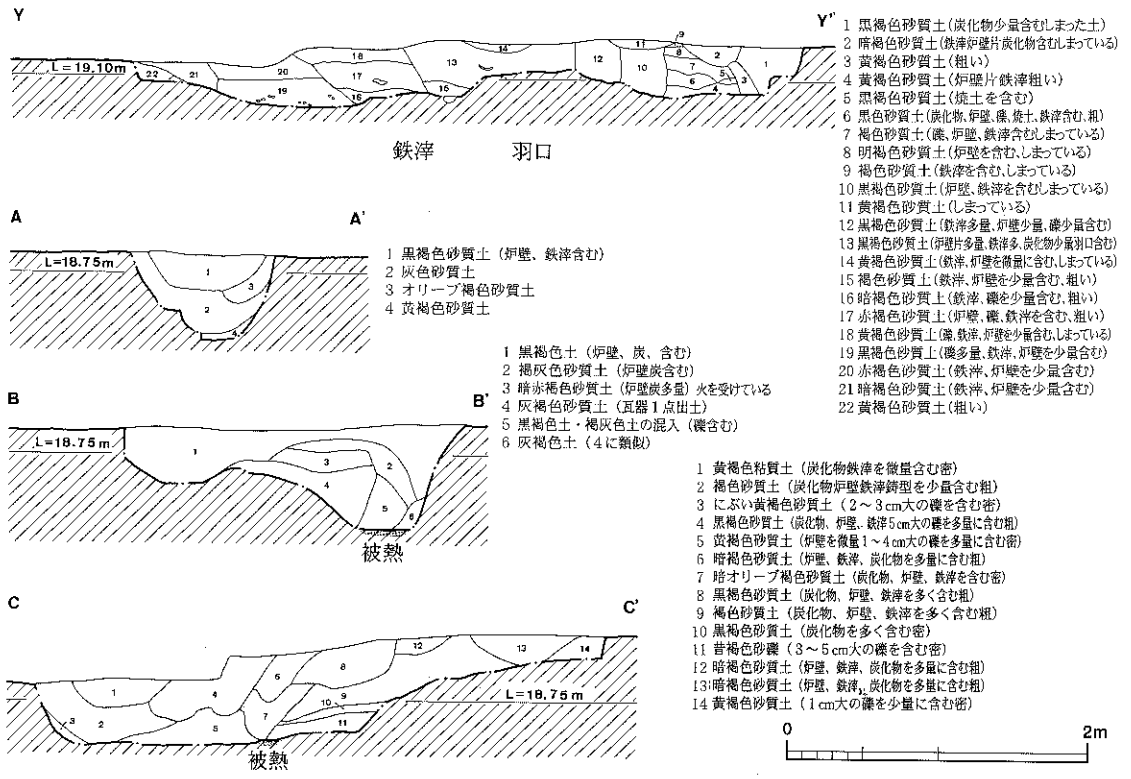
第23図　トレンチ実測図



第24図　トレンチ東部平面実測図

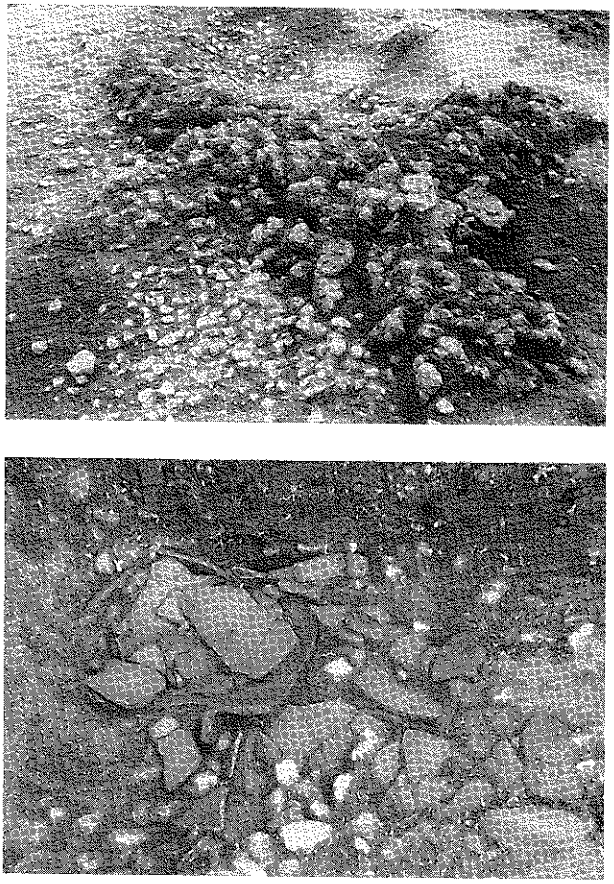
る。底面に幅0.8ｍ、検出長1.1ｍの溝状の掘り込みを持つ。埋土は黒褐色もしくは赤褐色の砂質土で、いずれの層にも鉄滓や炉壁片、炭化物を含む。大型品の鋳造を行った土壙と考えられる。

東部ブロックにおける主な遺構は以上であるが、これらの遺構をどの様に解釈するかが問題となるところである。現在のところ、礫の集積しているSX10を鞴坐と想定したい。そし

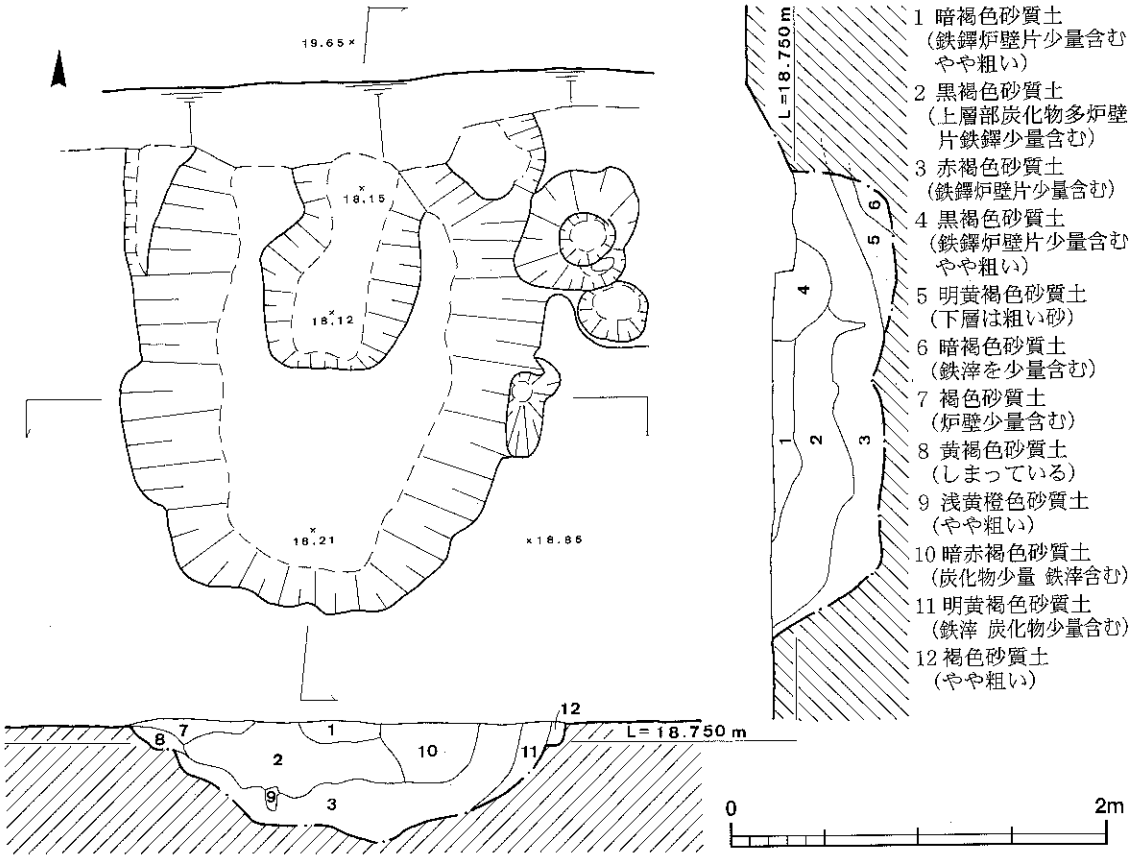


第25図　トレンチ東部SX09・SD02付近断面図

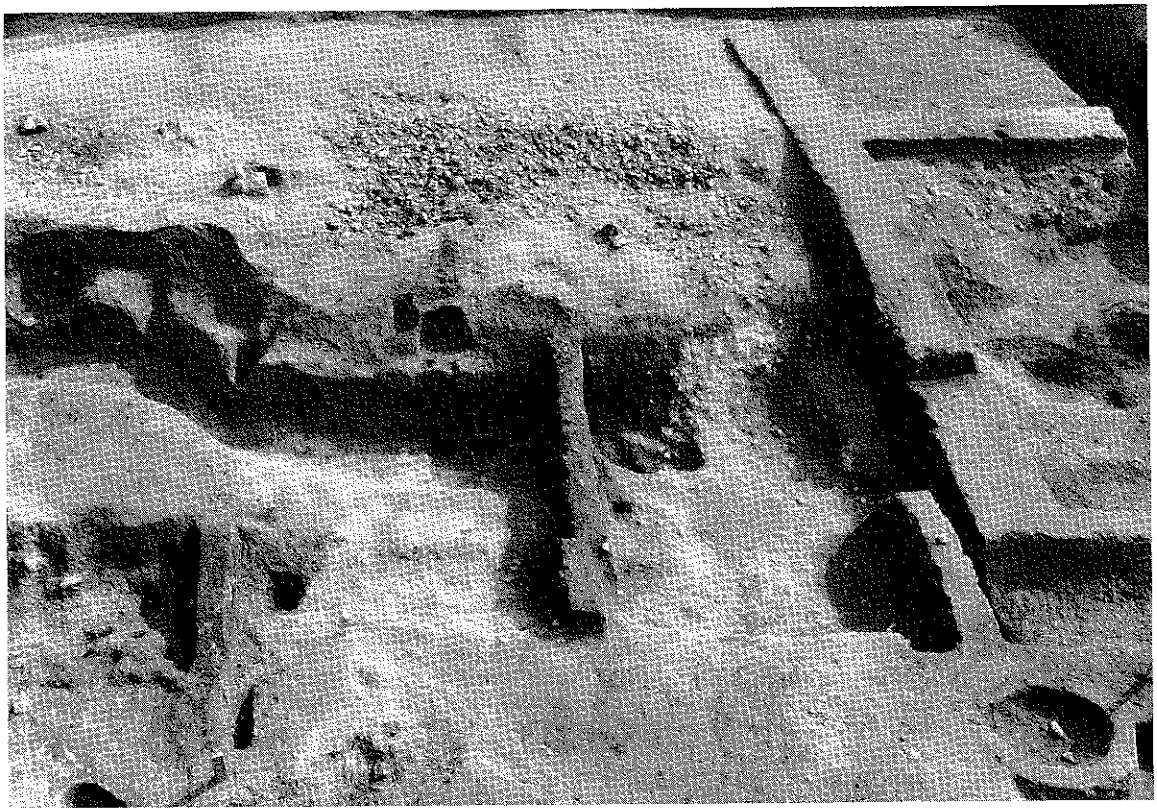
てSX10の西側にあるSD02・03のB－B′セクションを見ると、溝の中に土を盛り上げた痕跡があり、その層の上面は火を受けて赤変している状況が窺える。これらのことから踏み鞴SX10に接する位置に土を盛って台を設け、そこに溶解炉を置いて鋳造を行ったと想定したい。SD02・03・SX09は湿気抜きの目的もあったことも考えられる。さらに鋳造土壙SX05の存在から、東部ブロックは大型品の鋳造を行っていたブロックと考えられる。しかし、他の鋳造遺跡において、溝の中に台を設けて溶解炉を設置する例がまだ見られないことや、鞴座の形態も明らかになっていない現状から、今後想定の変更を行う必要が生じる可能性は高いが、現段階では妥当な解釈と考える。



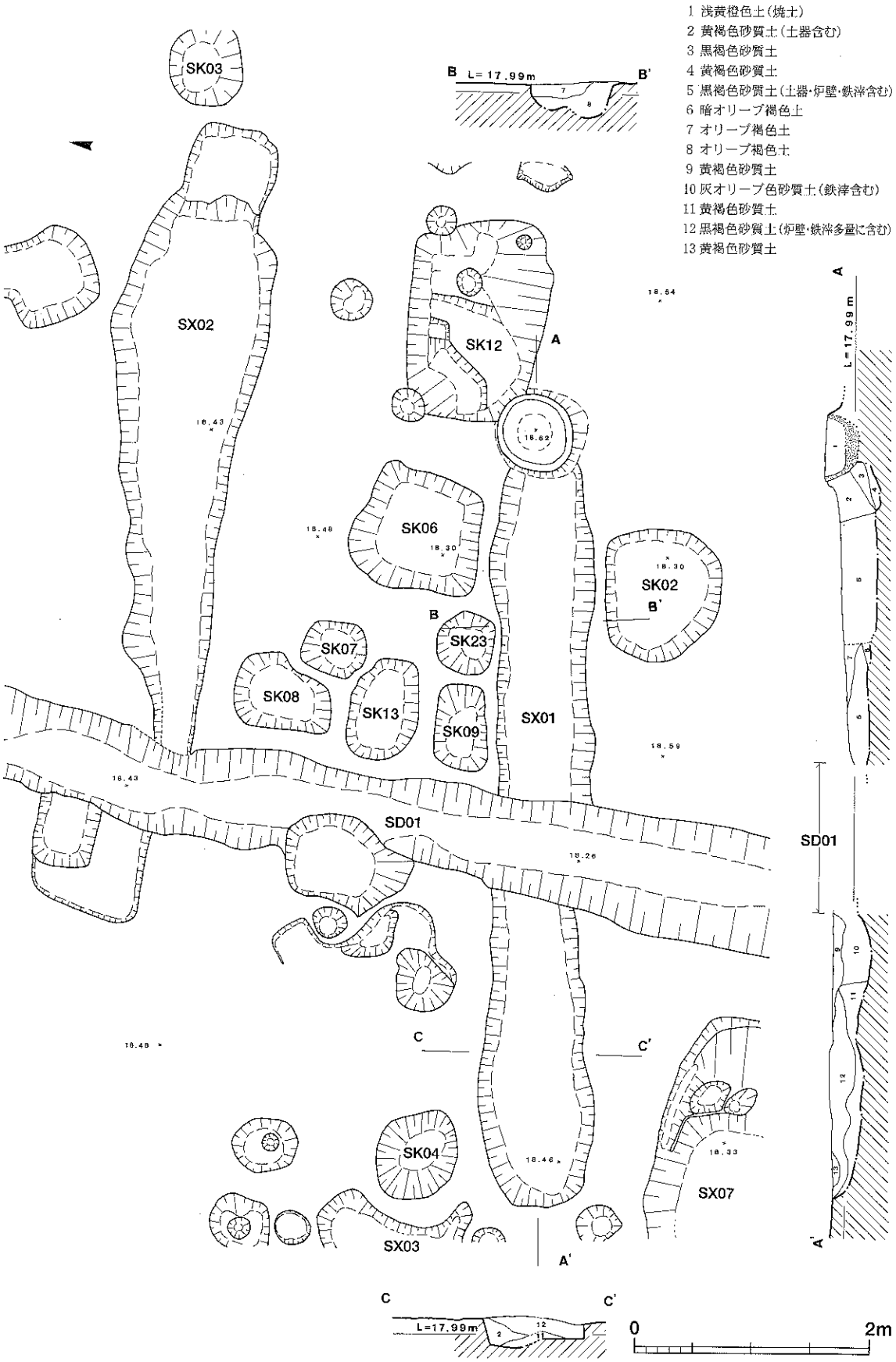
第26図　遺物出土状況（上：SX10 下：SX09）



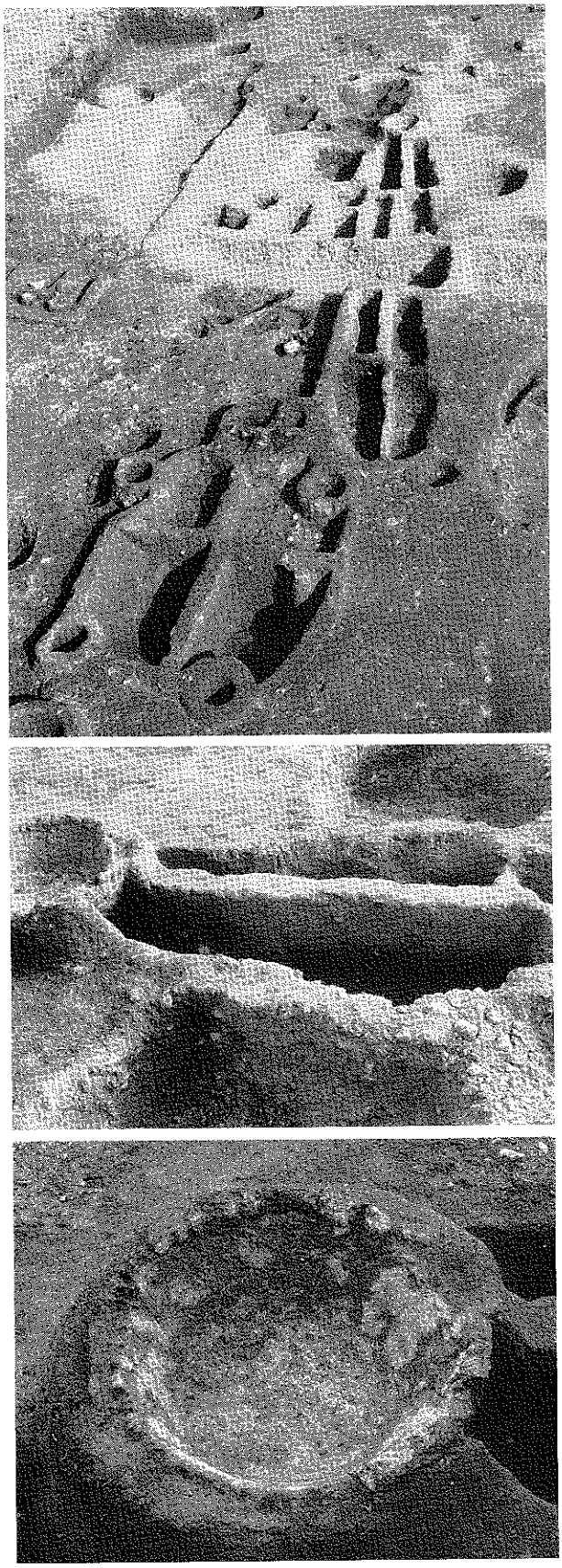
第27図　SX05 実測図



第28図　SX10と SD02・03・ SX09（西から）



第29図　SX01・02実測図



第30図　SX01掘削状況
（上：西から、中：南から、下：南から）

②中部ブロック（第29図）

中部ブロックは、溶解炉底が完存していたSX01をはじめとして、溶解炉と鋳造土壙が組み合ったと思われる遺構が中心となる。

鋳造土壙 SX01（第30図）　Ａ３・４区で検出した鋳造土壙。溶解炉底が完存している。周囲の土ごと切り取り、発砲ウレタンで保護し取り上げたため、炉の外側の状況は不明であるが、内径50㎝、深さ20㎝、炉壁の厚さは５～８㎝を測る。上端は平坦に整えられており、３段に分割する甑炉と考えられる。炉の据え付けは、地面を若干掘り窪めているものの、底部は土壙底についておらず、若干浮いた状態で検出している。このことはSX02とも共通するが、枕木状のものに乗せていた可能性がある。

この溶解炉の西側には、長さ6.2ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍの溝状遺構がある。埋土は黒褐色やオリーブ褐色の砂質土が多く、炉壁や鉄滓も含まれている。

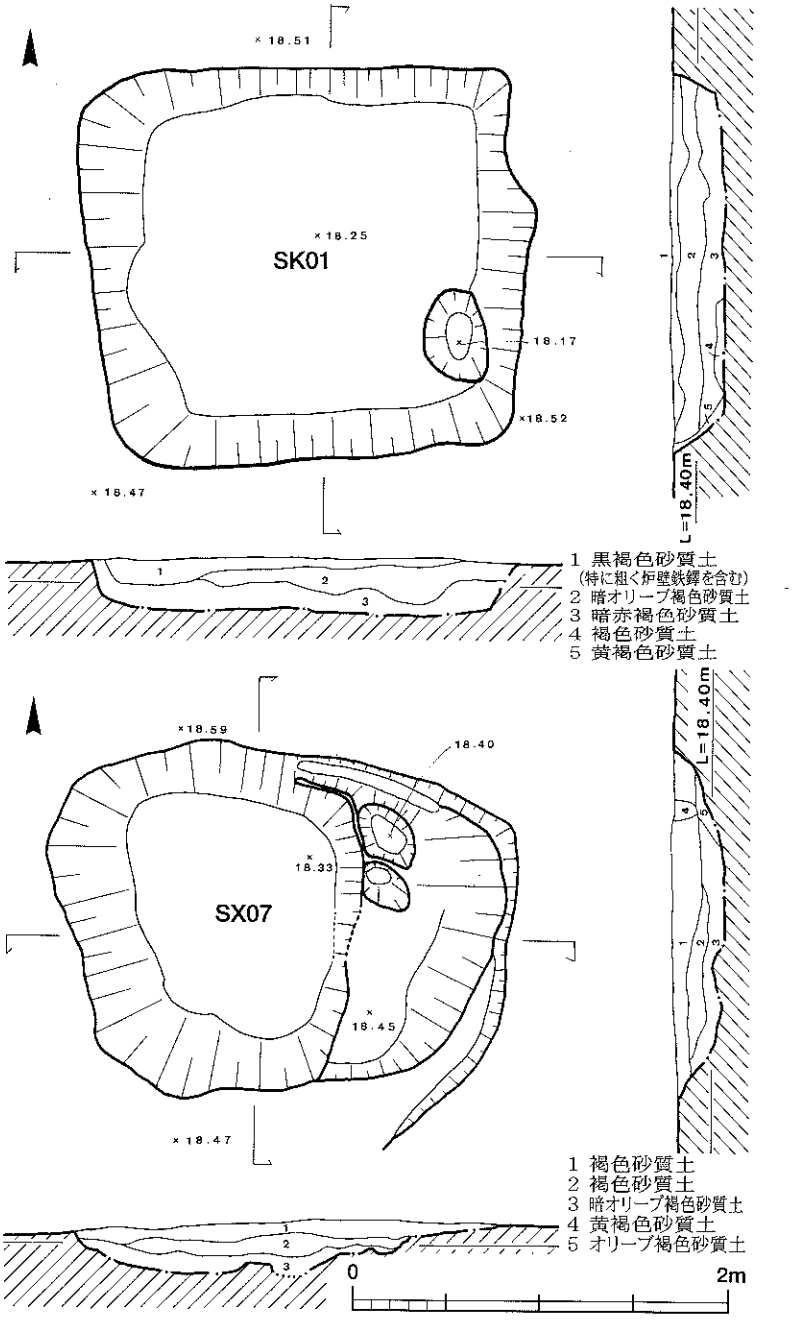
鋳造土壙 SX02　SX01の北側にある土壙で、形状はSX01に類似する。SX01で溶解炉の残存していた位置には隅丸方形のピットがある。ピット内には溝に直交する方向に２条の溝状の窪みが見られ、２本の棒を枕木状に置いていた可能性がある。

SX02の溝状遺構は、西端をSD01に切られているため全長は不明だが、検出長は５ｍである。幅はピット寄りの部分が

最も広くなり、西側は徐々に細くなる。最大幅1.3m、最小幅0.35m、深さ0.2mを測る。東端のピットより溝の方が一段深く掘り込まれている。

鋳造土壙 SX03　SX01の北西に隣接してある土壙。隅丸方形の土壙の東辺にSX02と同様の規模のピットが付属している。これも溶解炉と鋳込みの土壙がセットになったものと思われる。土壙の長辺は2.3m、短辺1.8mを測る。隅丸方形の土壙の四隅には、直径約30cmの小ピットがあり、覆い屋があったのかもしれない。土壙埋土からは、炉壁片、鉄滓などが出土している。

中部ブロックの遺構は、前述したように溶解炉据え付けのための円形土壙と鋳込みのための溝状遺構あるいは方形土壙とがセットになっている。溝状遺構と方形土壙との差異が、何に起因したものかは判断できないが、ここでは小型品の鋳造を行ったブロックと考えている。

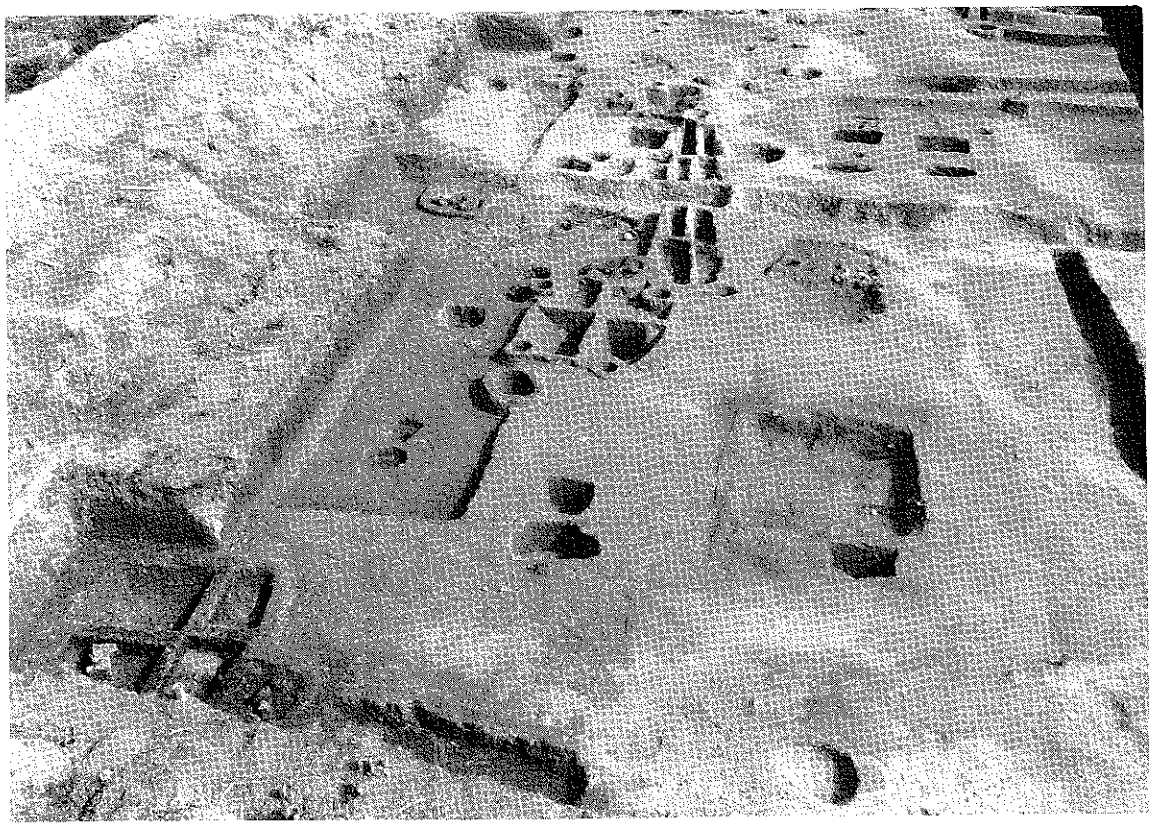


第31図　SK01・SX07実測図

③西部ブロック

西部ブロックでは中部ブロックとは異なり、方形あるいは不定形の土壙がある。東部・中部のブロックに比べ、土壙内の鉄滓や炉壁片の出土量が少なく、中部ブロックの鋳造土壙とは性格を異にするものと考えられる。

土壙 SK01（第31図）　B２区で検出したほぼ正方形の土壙。東西2.2m、南北2.1m、深さ0.3mを測る。遺構埋土は、上層で鉄滓等を含んでいるが、下層ではほとんど認められない。



第32図　トレンチ中・西部全景（西から）

壁面に黄褐色砂質土を貼ったような痕跡が認められる。

土壙 SX07（第31図）　SK01の東、Ｂ３区で検出した土壙である。SX01、SX03と近く、位置的には中部ブロックに入るものだが、形態的に異なることから西部ブロックとして報告する。東西2.5ｍ、南北1.9ｍの台形に近い不整形の土壙で、西半部は二段に掘り込んでいる。掘り込んでいる部分の規模は東西1.7ｍである。深さは、浅い部分で0.15ｍ、深い部分で0.3ｍである。この土壙の埋土も SK01と同様にあまり鉄滓や炉壁を含んでいない。

土壙 SX04　Ａ１区で検出した正方形の土壙である。土壙の南東部に小型の方形ピットが取り付く。土壙の規模は、一辺1.9ｍ、深さ0.2ｍ、ピットは南北0.7ｍ、東西0.6ｍ、深さ0.2ｍを測る。この土壙からは鉄滓・炉壁が出土しており、鋳造土壙となるかもしれない。

西部ブロックでは、埋土に焼土や鉄滓・炉壁をあまり含まない遺構が目を引く。ここでは鋳込みとは異なる作業を行っていた可能性が高い。明確な根拠となるものは検出していないが、鋳型製作などに関連する作業を行っていたブロックと考えている。

3．出土遺物

今回の調査では、整理箱に120箱の遺物が出土した。種類には土器類（須恵器、土師器、瓦器、陶器など）と、鋳造関連遺物（鋳型、土製道具類、炉壁、鉄滓など）がある。これらの時代は、大きくは古墳時代後期から奈良時代前半期頃のものと、鎌倉後半期から室町時代初頭頃のものとに分かれる。また少量ながら平安時代中後期のものがある。なお、本調査の成果で注目できる鋳造関連遺物は、鎌倉から室町時代に属するものである。以下に、その概要を報告する。

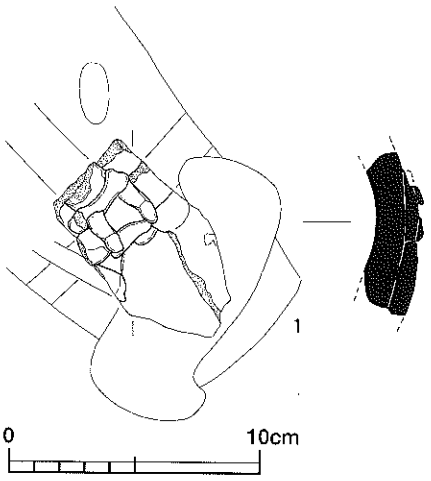
A．古墳～奈良時代の土器類

溝 SD05［B・C区-5］（第33図1、第34・35図2～16）　埴輪（1）、土師器（2～7）、須恵器（8～16）がある。6世紀後半のものが主体である。

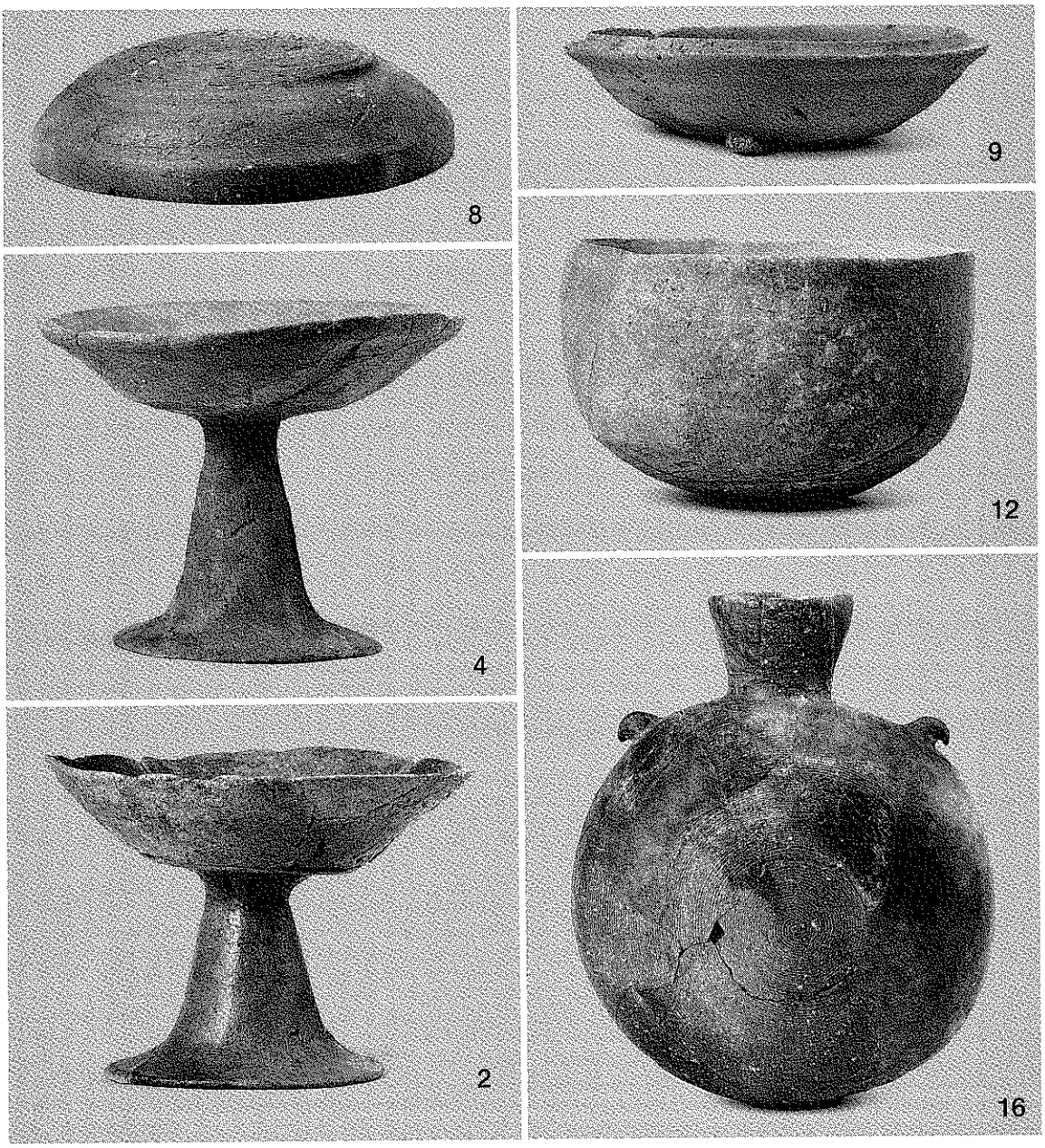
1は、馬型埴輪の頭部片である。方形の辻金具に、革製の面繋とみられる紐が三方に取り付いている。辻金具の残る一方には、短い紐に円弧を描く粘土板が取り付いており、この粘土板が鏡板の一部とみられることから、図示した位置に当たる破片であることが分かる。さらに、辻金具の下方には、引き手の一部とみられる紐状の表現がある。他に同一個体片はないが、摩滅は進んでいないため、比較的近い場所から流入したものと推測される。

土師器には高杯、甕がある。2～4は口径17.5cm前後、器高13.5cm前後と、ほぼ同法量の小型高杯である。いずれも単純に外傾する杯部と短く開く脚部をもつ。脚部は粘土板を丸めて中空の筒をつくり、これを握り絞り軸としている。また、この脚部を杯部の底に貫入して接合し、その頂部を粘土でふさぐ製作手法についても共通している。甕には大型（5・6）と小型（7）がある。5は、くの字状に外反する口縁をもつ長胴甕である。口径23.8cm。6は大型で球形の体部もつ甕である。口縁はやや内彎気味に立ち上がる。口径23.0cm。7は球胴に単純外反の口縁をもつ小型甕で、器壁が平均0.7cmと厚い。口径12.0cm、器高15.2cm。

須恵器には、杯、椀、高杯、甕、提瓶がある。8は杯蓋、9・10は杯身でそれぞれ頂部・底部にはヘラケズリが施される。口径13.4cm、12.0cm、13.6cm。11・12は椀である。口縁が直線的に立ち上がる11と、底部から口縁にかけてやや丸みを帯びる12には、やや形態差が認められる。いずれも体部下半にはヘラケズリが施される。11は口径13.8cm、器高6.1cm。12は口径11.8cm、器高7.6cm。13は高杯脚部である。長脚二段が退化して低くなり、透かし穴をもたない形態となっていることから、先の杯よりもやや時期の下るものと



第33図　馬形埴輪実測図



第34図　SD05出土土器

考えられる。14・15は甕口縁片、16は提瓶である。提瓶の体部は、片面は突出した膨らみをもつが、もう片面はやや偏平気味である。吊り手下端は体部に接していない。口径8.2cm、器高30.1cmを測る。

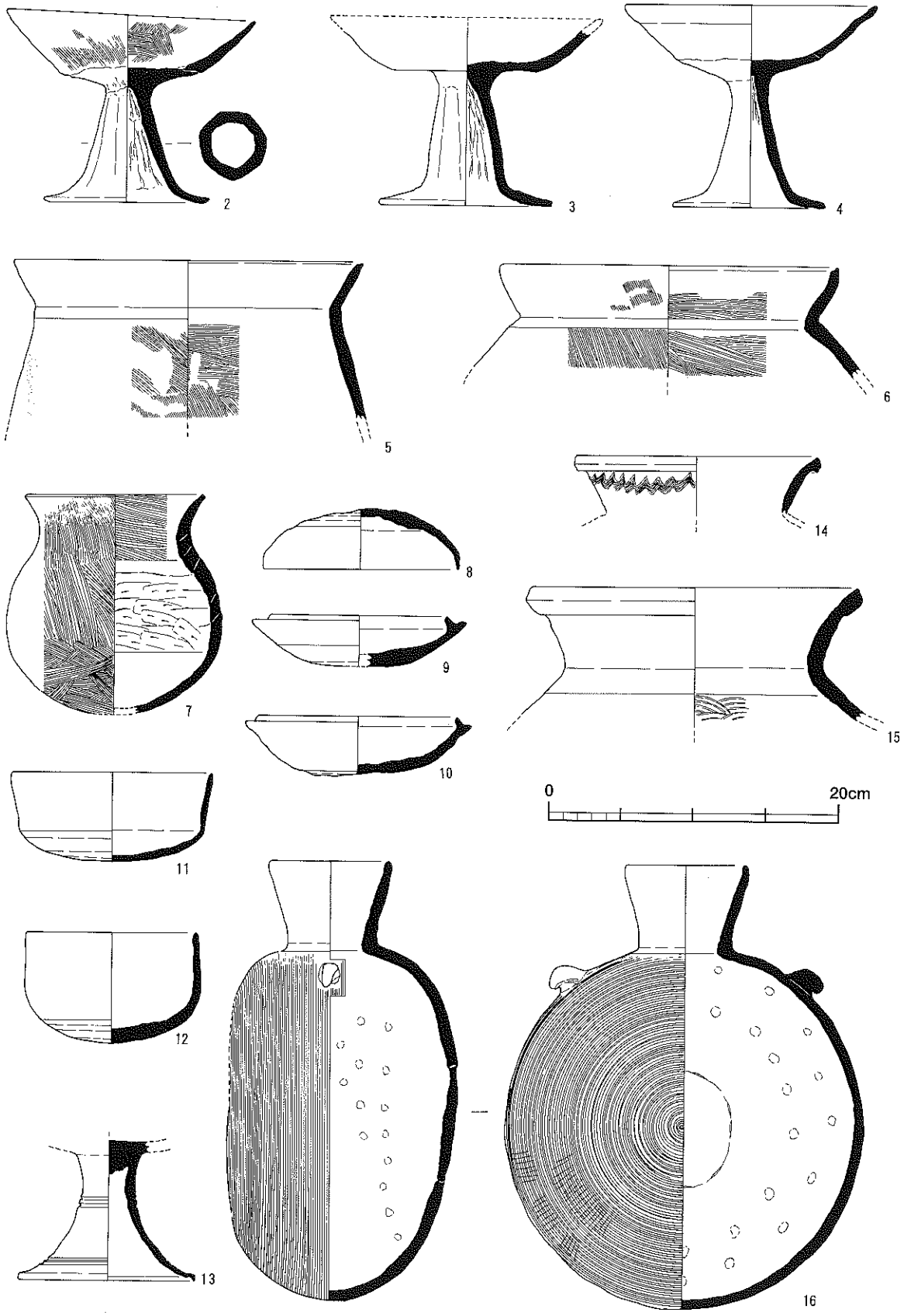
溝 SD01［A－３区］（第36・37図17）　須恵器杯Ｇがある。口径10.3cm。７世紀前半。

土壙 SX04［A－１区］（第37図18）　口縁は強く外反する土師器長胴甕がある。口径28.6cm。

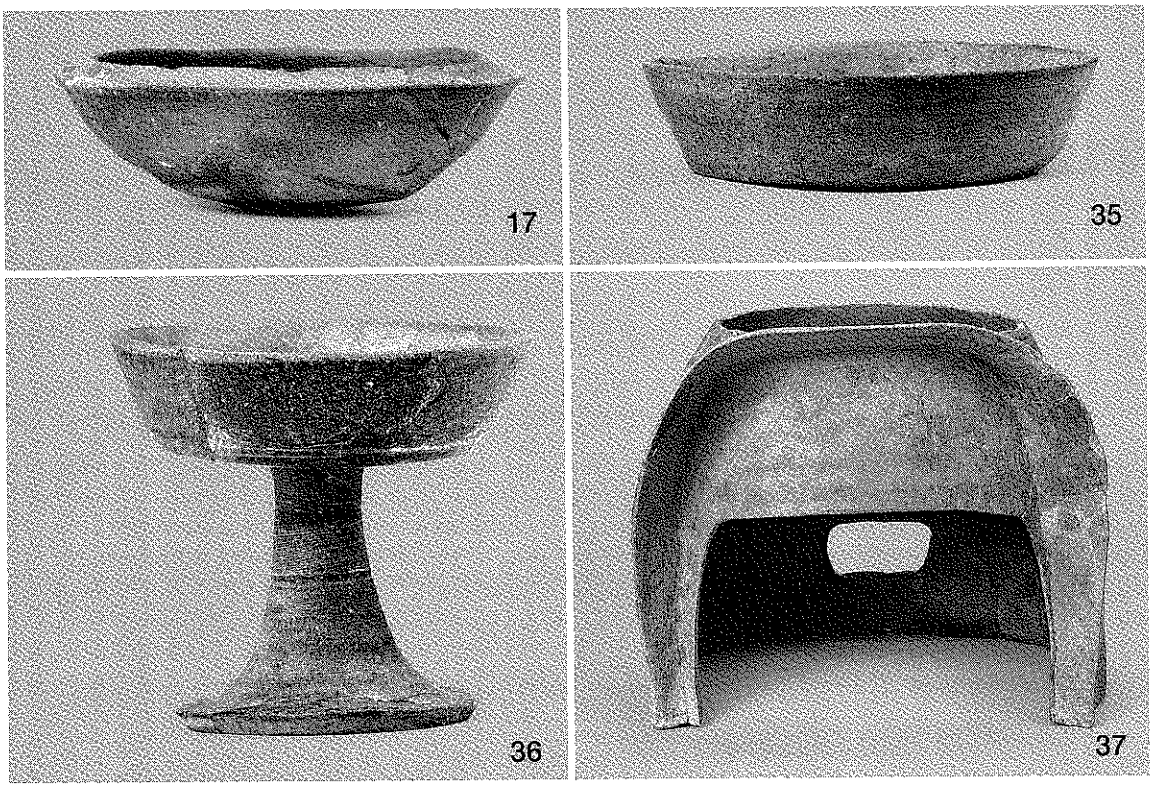
土壙 SK18［B－４区］（第37図19）　須恵器杯蓋がある。口径17.0cm。７～８世紀前半。

柱穴 P04［A－４区］（第37図20）　須恵器杯Ｂがある。口径16.6cm。７～８世紀前半。

土壙 SX03［A－２・３区］（第37図21・22）　土師器杯Ａ、長胴甕がある。21は外面には



第35図　SD05 出土土器実測図



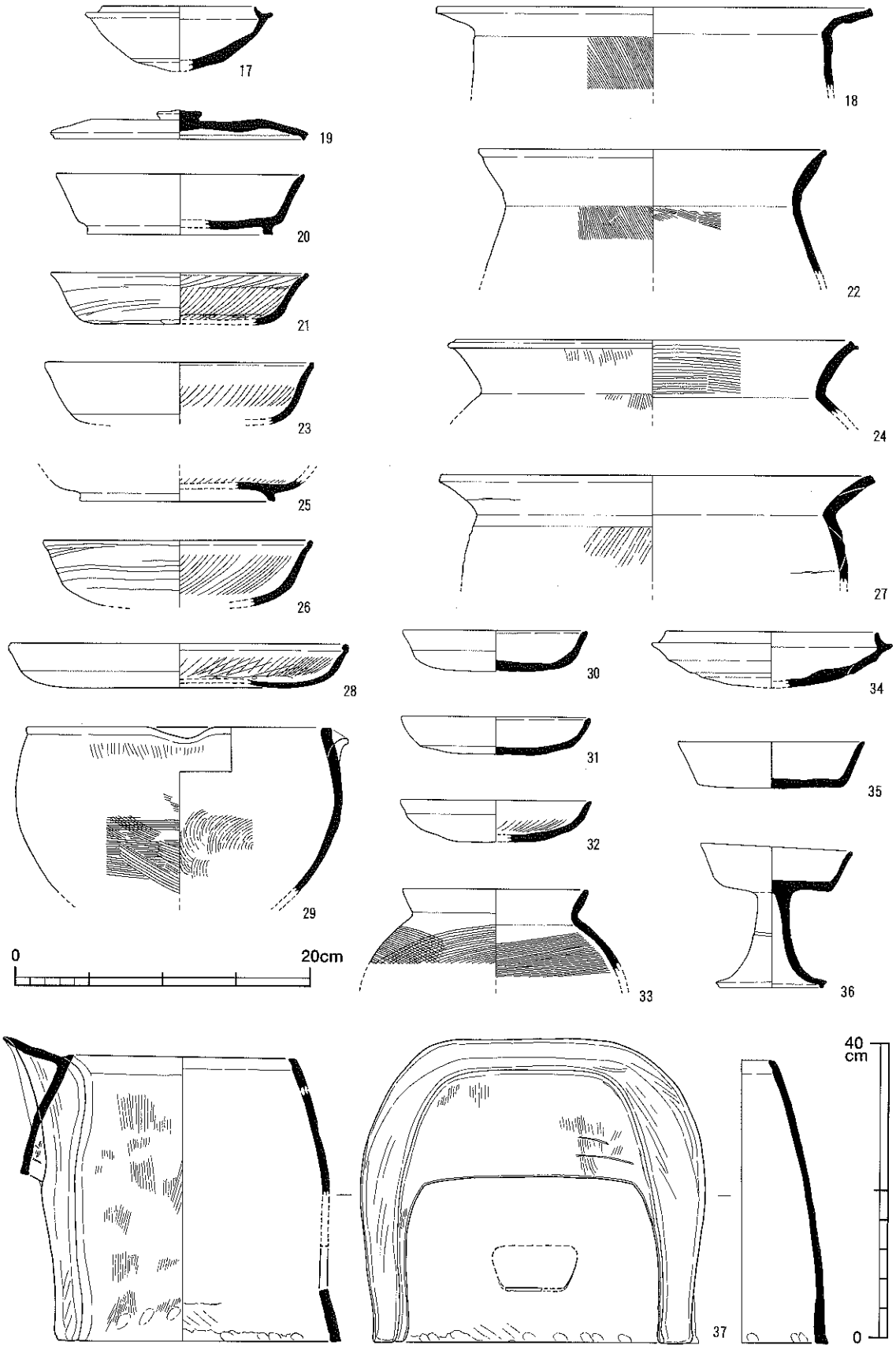
第36図　出土土器１

ヨコヘラミガキと底部ヘラケズリ、内面に２段放射文と底部に螺旋文を施す。口径17.6cm。

土壙 SK22［B－４区］（第37図23）　土師器杯Ａがある。口径18.3cm。８世紀前半。

土器溜り［A－３区］（第36・37図24・25・37）　土師器杯Ｂ、甕、移動式竈がある。37は焚口周囲に鍔をもつ移動式竈で、全体の40％程度の破片がある。鍔は幅約10.0cm、厚さ0.8cmの粘土板でつくられ、頂部は竈本体の高さを上回っている。本体には頂部と前面部が開口している他、背面下半に方形孔が穿たれていたことがわかる。内外面にはハケとユビナデの痕跡が顕著に残る。横幅48.8cm、奥行き45.3cm、器高39.0cm。

包含層［A－２・３・４区、B－４・６・７区、C－５区］（第36・37図26～36）　土師器杯Ａ、杯Ｃ、皿Ａ、片口鉢、甕、須恵器杯、杯Ａ、高杯などがある。概ね６世紀後半から８世紀前半頃のものである。なお26・33・35・36はA-3区から出土しており、土器溜りの遺物である可能性が高い。26は内面に１段放射文をもつ杯Ａ。口径18.3cm。28は内面に１段放射文と螺旋文をもつ。B－７区。口径22.6cm、器高2.7cm。29は橙褐色を呈する片口の土師器鉢であるが、内面に同心円のタタキ痕跡を残している。外面はハケ。口径20.4cm。A－４区。30～32は杯Ｃであり、32の内面には放射文が施されている。それぞれ口径12.4cm、12.6cm、12.8cm。A－４区、A－２区、B－７区。34は内面にかえりをもつ杯身で、外面下半にはヘラケズリが施されている。C－５区。口径19.4cm。35は杯Ａで口径12.6cm、36は無蓋高杯で口径10.2cm、器高9.7cmである。



第37図　出土土器実測図１

B．平安・鎌倉～室町時代の土器類

溝 SD02・03［A～C－６区］（第38図38～49）　土師器皿・釜、瓦器椀・釜、陶器甕などがある。概ね13世紀後半から14世紀前半頃に該当する資料である。次節で報告する鋳造関連遺物は、本遺構内とその付近に比較的集中して出土していることから、同時期に廃棄された遺物とみることができる。

38～42は土師器皿である。全体的な形態は、口縁部が底部から外反気味に直立し逆台形状を呈するもので占められる。口縁端部はいわゆる面取りを明瞭に施すものはなく、丸みを帯びて収まっている。底部不定方向のナデ。法量は38～41が口径7.8～8.3㎝、器高1.1～1.3㎝とほぼ同規格とみてよい。42は口径9.7㎝、器高1.9㎝と前者に比べてやや大きい。いずれも褐色を呈する。40・41の口縁内面端部には煤が付着している。

43～45は瓦器椀である。43・44は平底で高台をもたないタイプである。口縁端部は先細り気味に単純に収まる。内面と見込みにヘラミガキを施すが、密度は粗く簡略である。楠葉型の末期型式にあたる。口径12.0㎝、器高4.3・4.0㎝。45は底部から口縁部が浅く開く形態で、断面三角形の低い高台をもつ。口縁端部は尖り気味に終わる。内面と見込みにヘラミガキが施されている。大和型。口径10.6㎝、器高3.7㎝。

46・47は土師器釜である。46は口径11.7㎝、器高約7.2㎝と小型で１～２人分程度の容量しかない。外面には煤の付着がある。

48は瓦質の釜である。長い鍔をもつ。口径35㎝、器高24㎝と瓦質釜としては大型である。49は常滑の甕である。体部形態は口縁部下端から肩部にかけては丸みをもって膨らむが、底部に向けてはこれよりやや直線的になる。外面には平行タタキを基本とする押印文が帯状に4条以上施されている。12世紀後半から13世紀初頭頃に生産されたものと考えられる。

土壙 SK11［A－４区］（第39・40図50～63）　土師器皿、瓦器椀などがある。これらの時期は前述の溝 SD02・03とほぼ同じ、13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。

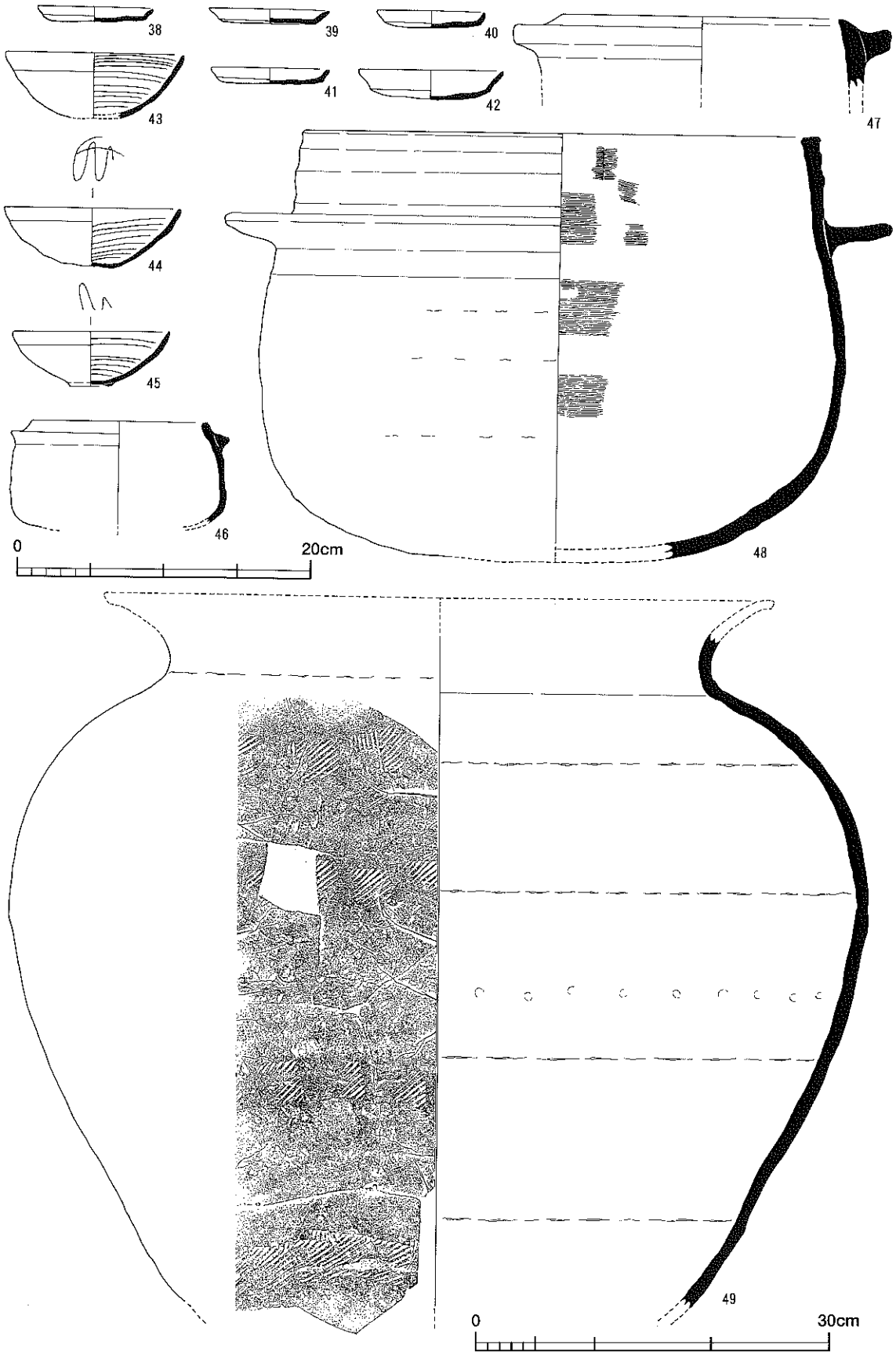
50～62は土師皿である。体部は、概ねが底部から外傾しつつ角度をもって立ち上がるが、下端のヨコナデにより中央で強く外反するものが含まれる。口縁端部は明瞭ではないヨコナデが施されるものと、単純なものとがある。法量は口径7.8～8.0㎝と、10.0～10.8㎝の２規格がある。いずれも褐色を呈する。63は瓦器椀。高台の有無は不明。復元口径12.4㎝。

土壙 SX07［B－３区］（第39図64）　瓦器椀などがある。64は底部がやや残存するが、高台の痕跡は認められない。体部上半にヨコナデによる屈曲をもつ。復元口径12.0㎝。

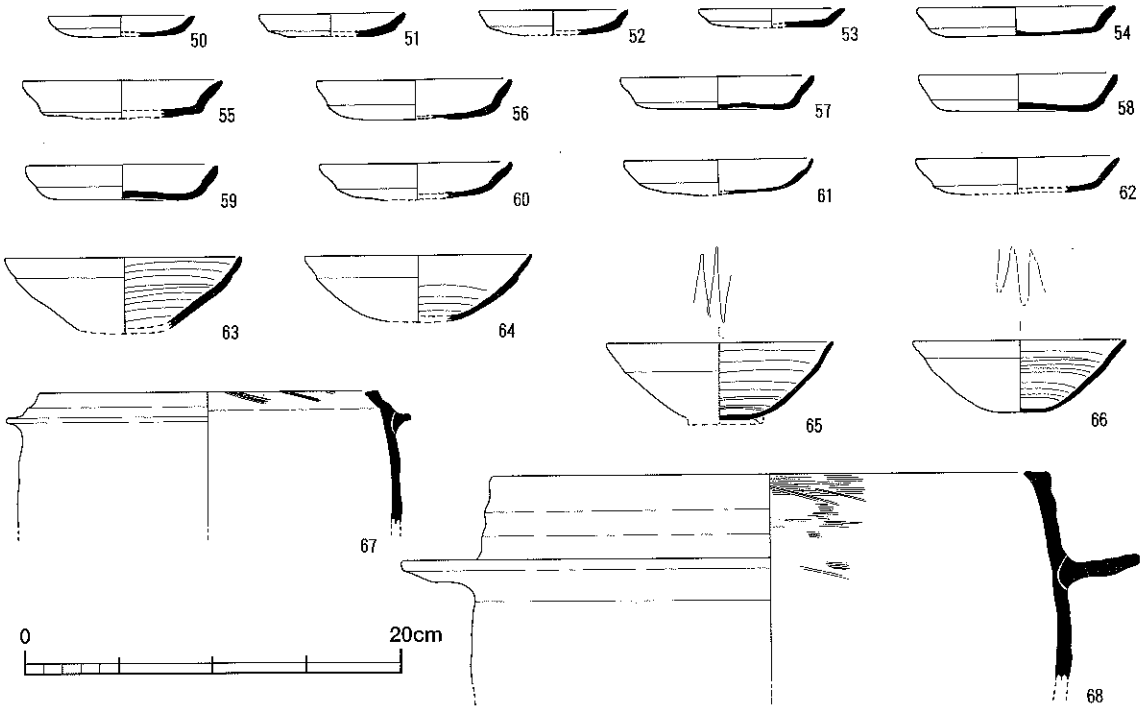
土壙 SX04［A－１区］（第39図65）　瓦器椀がある。65は高台剝離痕有り。復元口径12.0㎝。

柱穴 P13［B－１区］（第39図66）　平底の瓦器椀がある。口径11.4㎝。

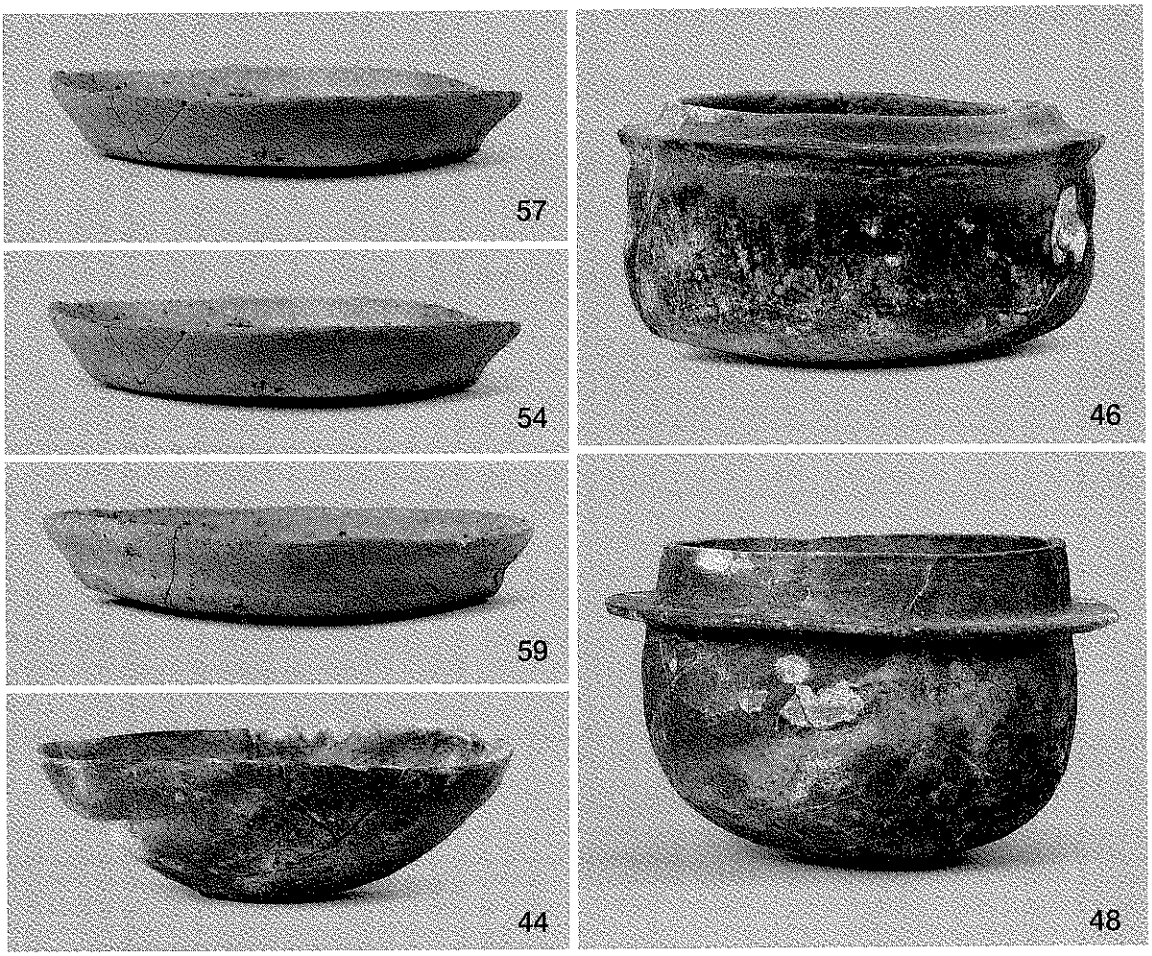
礫集積遺構 SX10［B－６・７区］（第39図67・68）　瓦質の釜などがある。67は鍔と口縁部



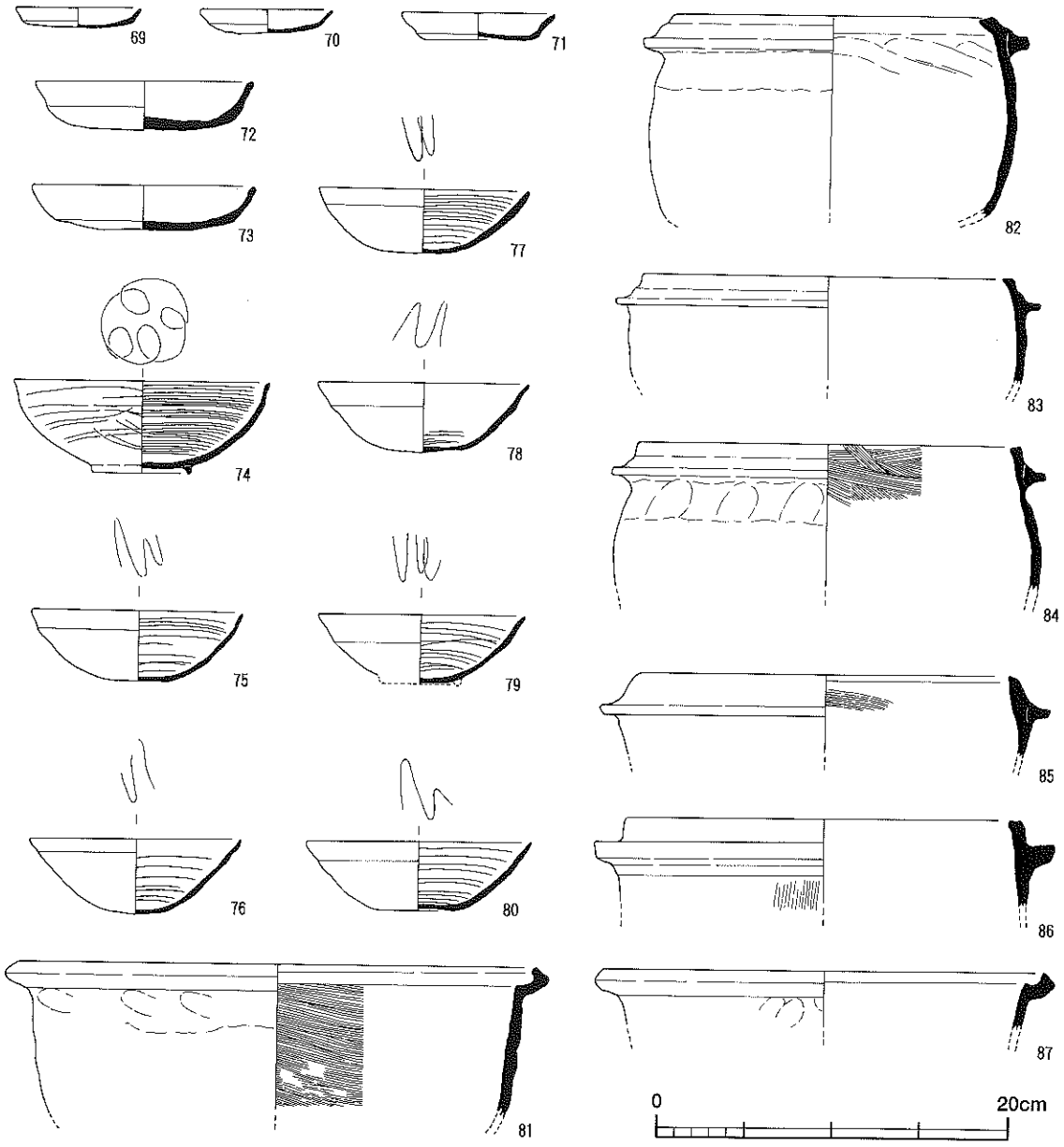
第38図　SD02・SD03・SD04・SD09出土土器実測図



第39図　出土土器実測図２



第40図　出土土器２



第41図　出土土器実測図３

は短い形態で、口縁は端部に向けてやや内傾する。復元口径17.8cm。67は法量を減じるものの、48とほぼ同じ形態で大型品である。復元口径29.4cm。

廃滓場 SX11［B－６・７区］（第41図71・83～85）　土師器、瓦質土器などがある。14世紀前半頃のものと考えられる。71は土師皿で、口縁端部はヨコナデにより尖り気味に収まる。口径8.8cm。83～85は瓦質の釜である。口径20.6～25.4cm。

包含層（第41図69・70・72～82・86・87）　土師器、瓦質土器などがある。これらは13世紀後半から14世紀前半頃にかけてに該当するものが最も多いが、12世紀のもの（74）も少量含まれている。また図示していないものに、前者の時期に属する石鍋の破片が２点ある他、11世紀前半頃のての字状口縁の土師器皿などが出土している。

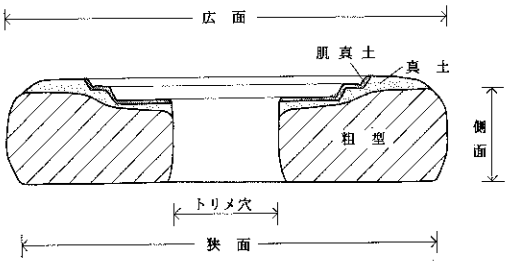
C．鎌倉～室町時代の鋳造関連遺物

鋳造関連遺物の種類には鋳型、土製道具類（きのこ形・三叉形・半球状・方形土製品）、取瓶、フイゴ羽口、溶解炉、鉄滓などがある。整理の対象とした遺物はコンテナに約12箱で、そのなかの約9箱分を図化している。

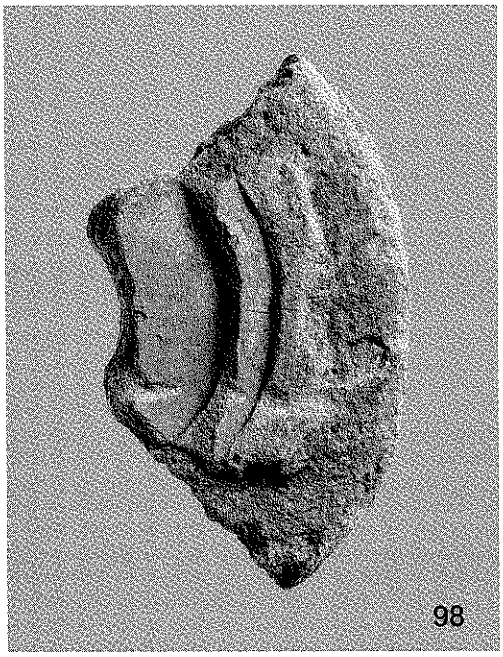
本遺跡での鋳造は概ね鉄製品生産を主体に操業を行っていたとみてよく、これらは共伴する土器類から、13世紀後半から14世紀前半頃にかけてのものであると考えられる。鋳造関連遺物が最も多く出土した地点はＡ６・Ｂ６・Ｂ７区で、それぞれ10点前後出土している。Ｂ６区東側で特に集中して出土する地点があり、不要になった遺物がまとまって廃棄された場所と考えられる。また、その周囲のＢ５・Ｃ６・Ｃ７区から５点前後出土している他、溶解炉付近であるＡ３区、Ａ１区でも３点ほどが出土している。

以下、ここでは種類ごとに報告を行う。

鋳型（第43～46図88～106）　鍋、羽釜などの日常的に使う製品を主体としつつ、仏具類などの非日常品が含まれている。用途不明なものもある。コンテナに約３箱分あり、３／４を図化して掲載している。残りは小片あるいは鋳型面が全く残存しないものである。



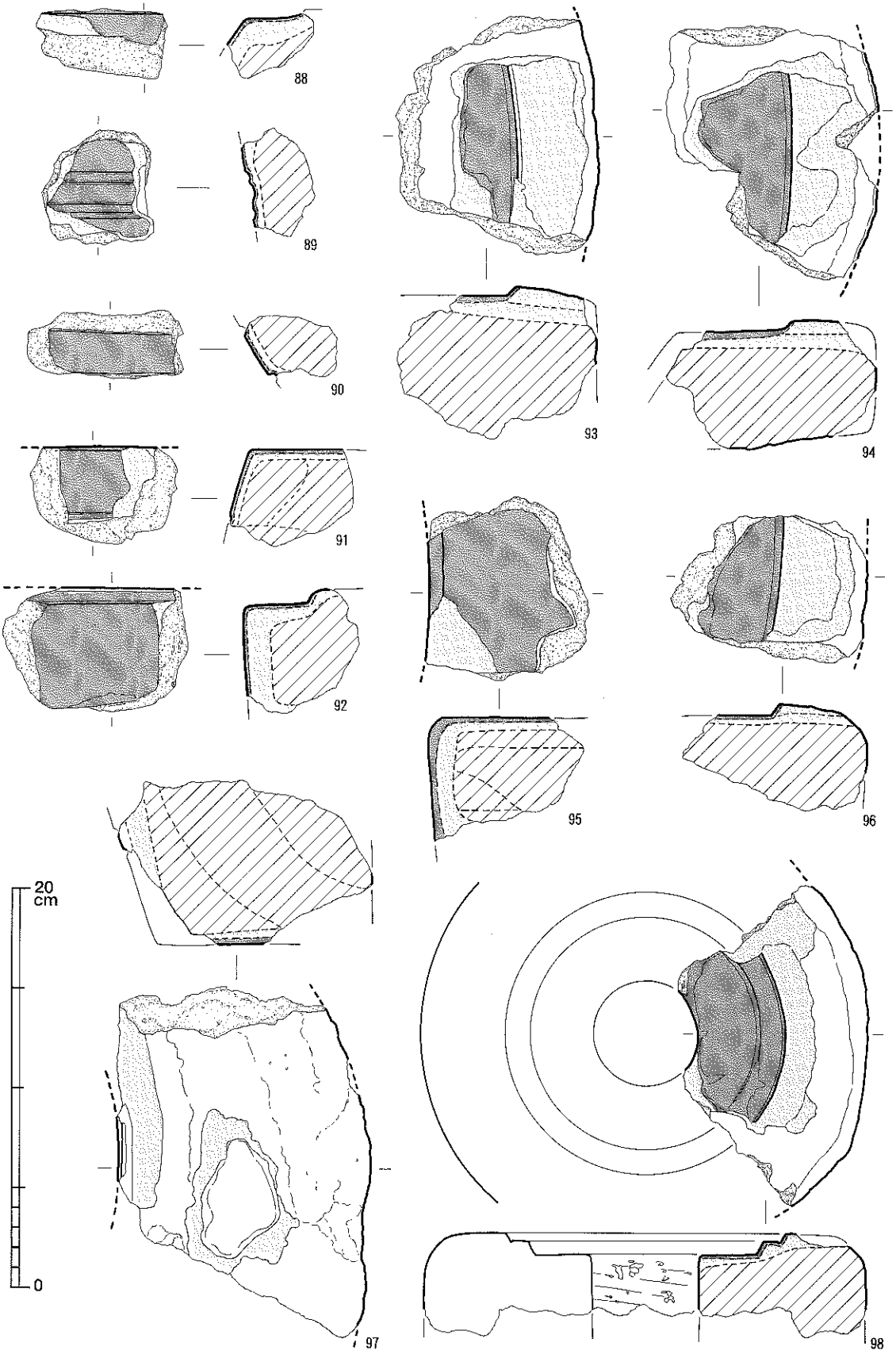
第42図　鋳型概念図



第43図　鋳型１

鋳型は基本的には粗型、真土、肌真土の３層構造である（第42図）。粗型とは鋳型の本体であり土台となるもので、８㎜大以下の砂粒や植物質のスサを含む粒子の粗い胎土からなる。真土は、粗型上面に塗られた粒子の細かい粘土の層である。鋳型面の基礎となる。肌真土は直接溶鉄が接する鋳型面に塗られた最も細かい粘土の層である。これらは成型、型焼きの後に施されている。すべての鋳型は破片で出土しているが、型から真土が剝離せず比較的良好に残存しているものが多い。また多くの鋳型面には黒色付着物が認められる。

88は鍋口縁の一部である。口縁端部が丸みを帯びて立ち上がるのが特徴である。体部の形状は口縁の角度が水平であれば浅く、やや斜めに立ち上がれば深くなる。法量は、鋳型頸部を見る限りでは直径30㎝以上はあると見られる。真土の厚みが約1.2～1.6㎝と他の鍋釜に比べやや厚い。



第44図　鋳型実測図１

89は、羽釜口縁の一部である。平滑な面に0.4、1.1、0.4㎝幅の浅い凹線３条が横方向に巡る。鋳型面は図の天地に対し横方向に緩やかな円弧をもつ。

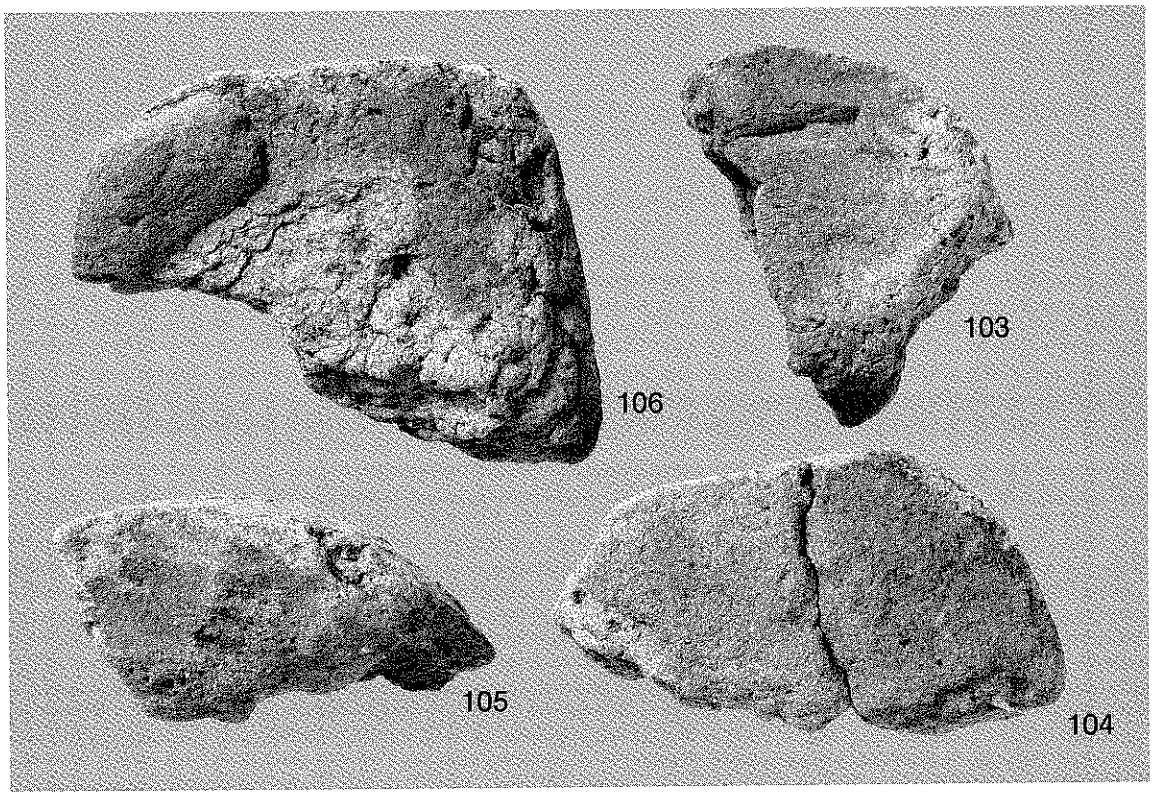
90は、2.4㎝幅の平滑面の上下に、約0.3㎝ほどの幅をもつ凹線が巡る破片である。図の横方向に緩やかな円弧をもつ中空製品であると考えられる。羽釜口縁の一部か。

91・95は２面に鋳型面をもつ破片である。91は鈍角、95は鋭角気味の屈曲をもつ。羽釜の鍔の一部である可能性が高い。口径は計測できないが、鍔の幅が５㎝を上回ることをみれば、かなりの大型品であるとみられる。91は頸部下方に0.3㎝幅の凹線が横方向に巡っている。92は鍋口縁から体部にかけての一部と考えられる。口縁は体部からほぼ直角に曲がり、端部は単純に収まる。幅は3.2㎝、厚みは0.5㎝を測る。口径の復元は困難であるが径40㎝以上の大型品であることは確実である。Ａ６区溝中出土。

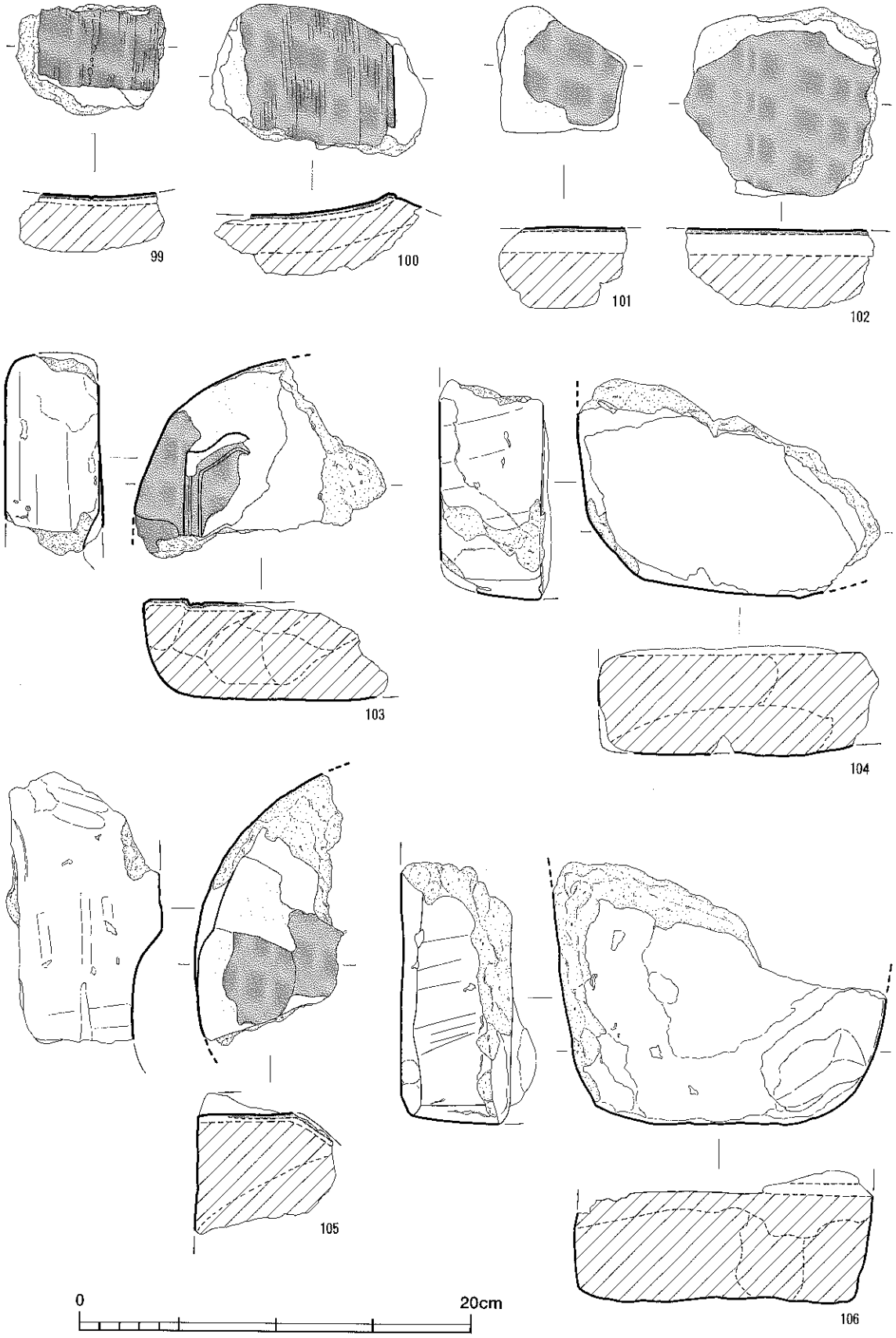
93・94・96は鍋口縁あるいは羽釜鍔の端部である。羽釜鍔の可能性が高いか。いずれも口径の復元は困難であるが40㎝以上を測る大型品である。また、粗型の側面が残っているが、ほとんど調整が施されていない。

97は２面に鋳型面をもつ破片である。羽釜の口縁から鍔にかけての一部と考えられる。

98は直径14.5㎝を測る円形製品の鋳型である。製品の形状は、内面に１段を有する浅い皿となる可能性が高いが、具体的用途は不明である。粗型側面には鍋・羽釜類の鋳型には認め



第45図　鋳型２



第46図　鋳型実測図 2

られない丁寧なナデが施されているほか、真土の厚みが約６㎜と薄いことが特徴である。また肌真土上面の黒色付着物が認められない。鋳型面の中央には、挽き型の軸を通すトリメ穴となる円孔が穿たれている。

99～102は、１面に比較的平坦で広い鋳型面をもつ。鍋・羽釜体部片の他、犂先鋳型底側となる可能性が考えられる。99は鋳型面にわずかな円孤をもつ。100は側面が緩やかな湾曲で立ち上がっている。型側面の上端部は、型同志の合わせ部分に当たるとみられる。

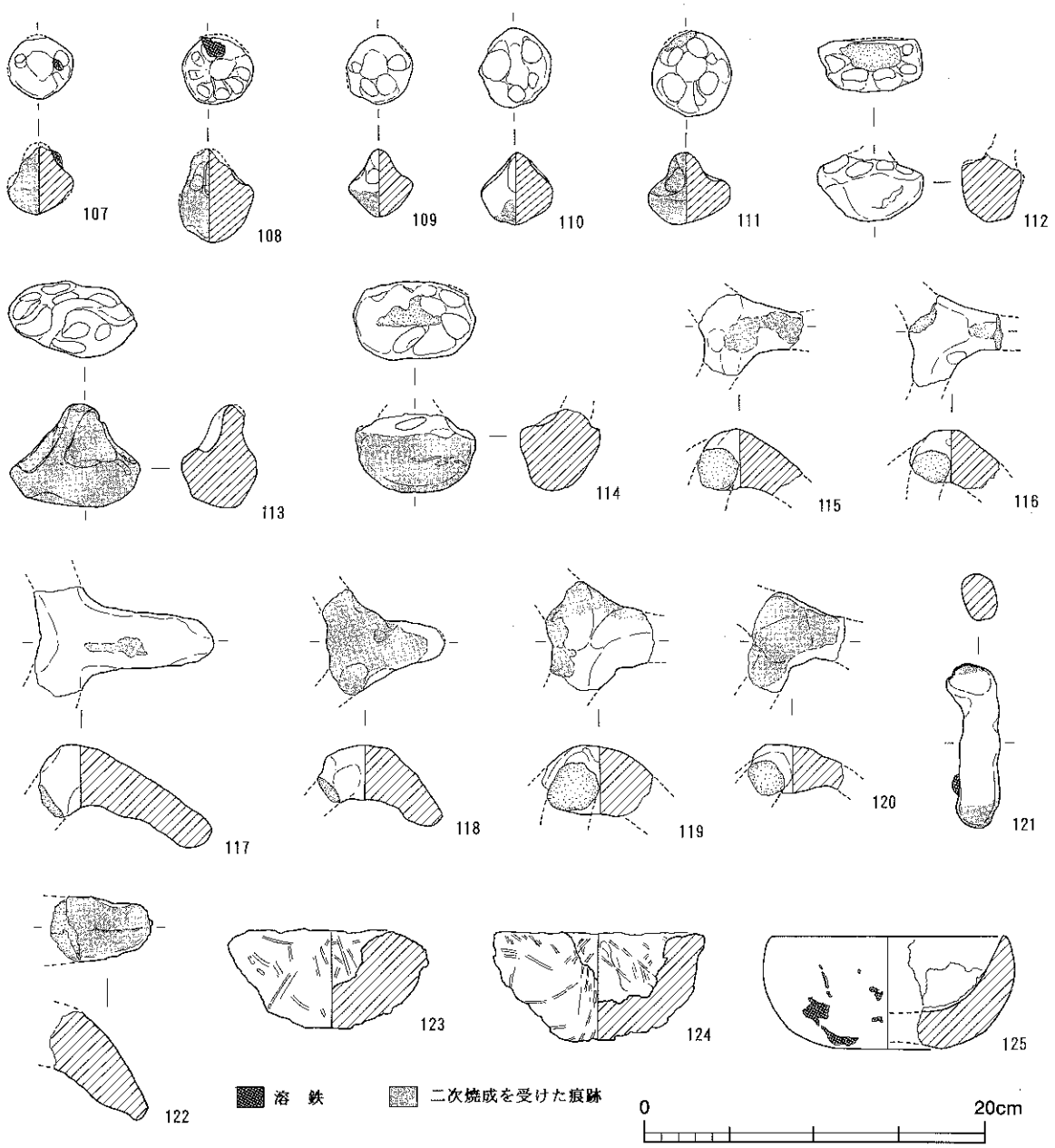
103は磬と考えられる小型製品の鋳型である。僅かに真土が残り、直線と波状線を端辺にもつ製品の外形が遺存している。その内面には２条の突線が巡る。真土の厚みは2.5㎜と他の製品に比べて最も薄い。肌真土は認められない。粗型は厚さ4.8㎝の円形粘土板で、側面と底面にはナデが施されている。鋳型面が広面で、底面が狭面となる。真土は粗型の広面全体に塗布されている。

104～106は完全に鋳型面が失われている破片である。103と粗型の形状が似ているため薄い小型製品の鋳型であると推測される。105の側面には湯口とみられる円錐形のくぼみがあり、くぼみ面には黒褐色付着物が認められる。湯口であれば横方向に開口することになる。図化していない鋳型の中に、同様のくぼみをもつ破片がもう一点ある。106には僅かな部分に真土が残っているが、鋳型面は遺存していない。

きのこ形土製品（第47・48図107～114）　球形の粘土塊の上半を指でつまみあげた、手づくねの道具をきのこ状土製品と総称する。複数の鋳造遺跡に類似品があるが[註２]、用途は明らかでない。形態には、断面がほぼ正円形のもの（107～111）と楕円形のもの（112～114）がある。前者は主に下半部が青灰色に還元している個体が多く、溶鉄粒の付着しているものもある。後者は全体的に器壁表面が剝離している状態の個体が多い。

三叉形土製品（第47・49図117～122）　手づくねの粘土棒３本をＹ字状に成型した道具を三叉状土製品と呼称する。三方とも交点を中心に同じ側に折り曲げられ足状にのびる。完全な形で遺存する個体はない。一方が長く二方が短い形状になるものがある。足の外側は概ね被熱によって還元され、青灰色を呈している。現代の民俗例の中に「エラモ」[註３]「エマラ」[註４]「サル」[註５]などと呼称されているものに同形状の道具が見出だせる。概ね中空製品鋳型の内側を炭で焼成する際に使用されており、トリメ穴に炭が落下することを防いだり、炭を支える支脚に使用されている。121は１本足であるが、片側の表面が還元状態にあり同用途とみられるためここに含めた。法量は個体間で大小があるとみられる。

半球形土製品（第47・50・51図123・124）　直径約12㎝を測る半球形の土製品である。内外面ともにスサを押しつけた痕跡が顕著で凹凸が著しい。他の道具類と異なり二次調整や付着物、剝離痕などがほぼ認められない。用途不明。内部が中空であるため容器の可能性も

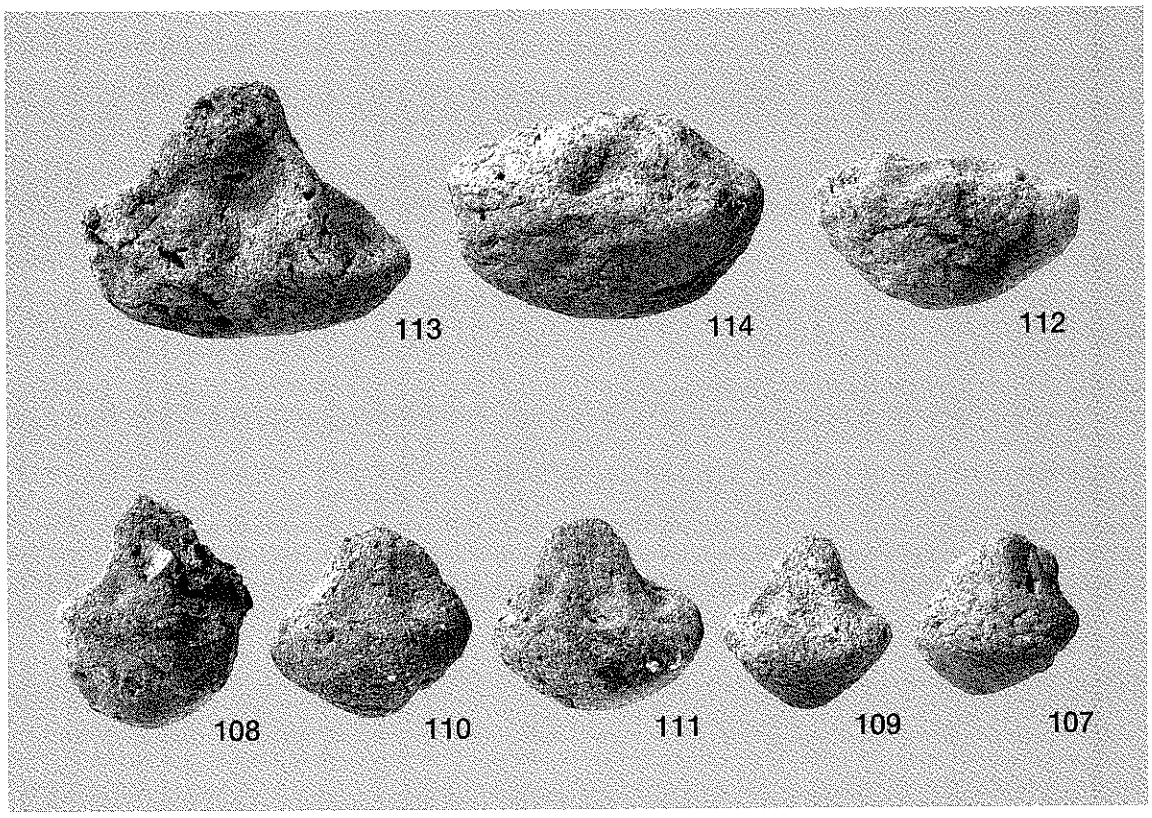


第47図　きのこ形土製品・三叉形土製品・半球状土製品・取瓶実測図

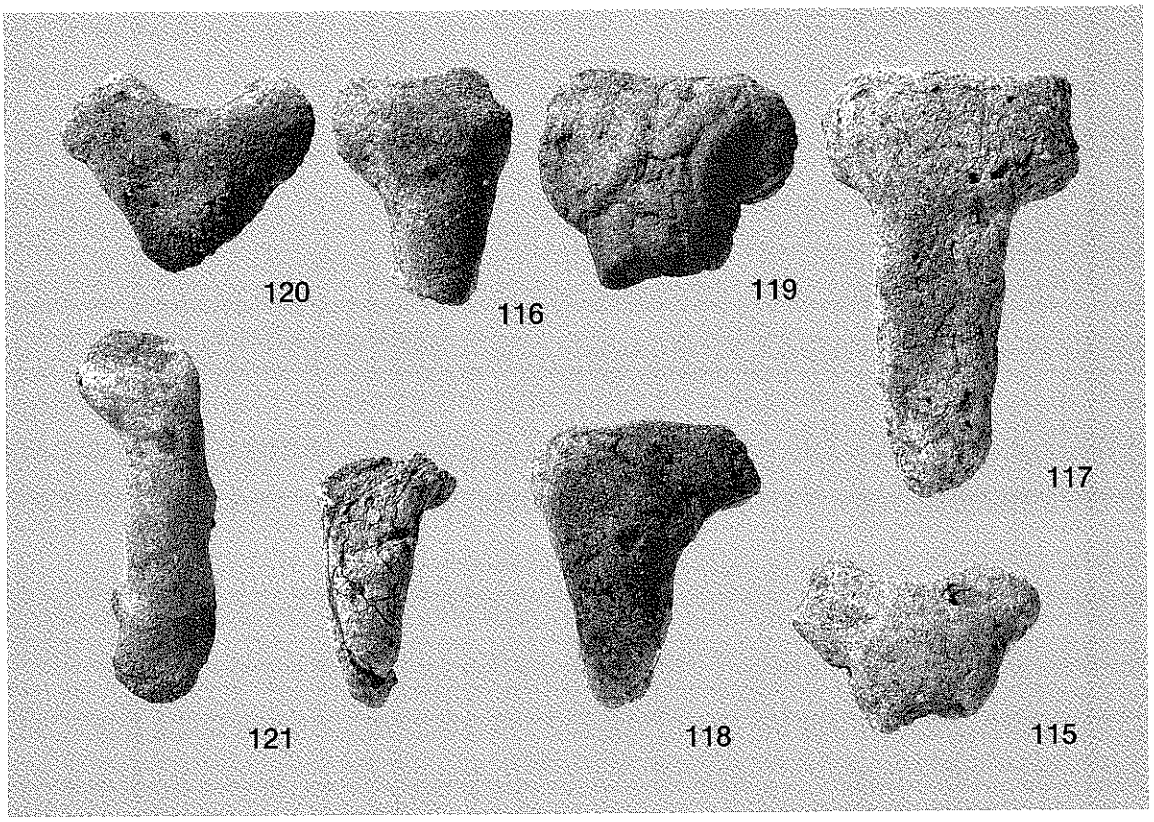
否定できないが、内面の特徴からは不向きなように思われる。124はほぼ完形で、123は全体の70％が残存する。また、図化したものの他にも６点の小片がある。

取瓶（第47・50・51図125）　取瓶あるいはルツボと考えられる。直径13.6cm、深さ6.7cmを測る中空の半球形で、内外面はナデが施されているため平滑である。直接被熱した痕跡はない。内面下半部全面には溶鉄が、外面には水滴状の黒色ガラス質が少量付着している。

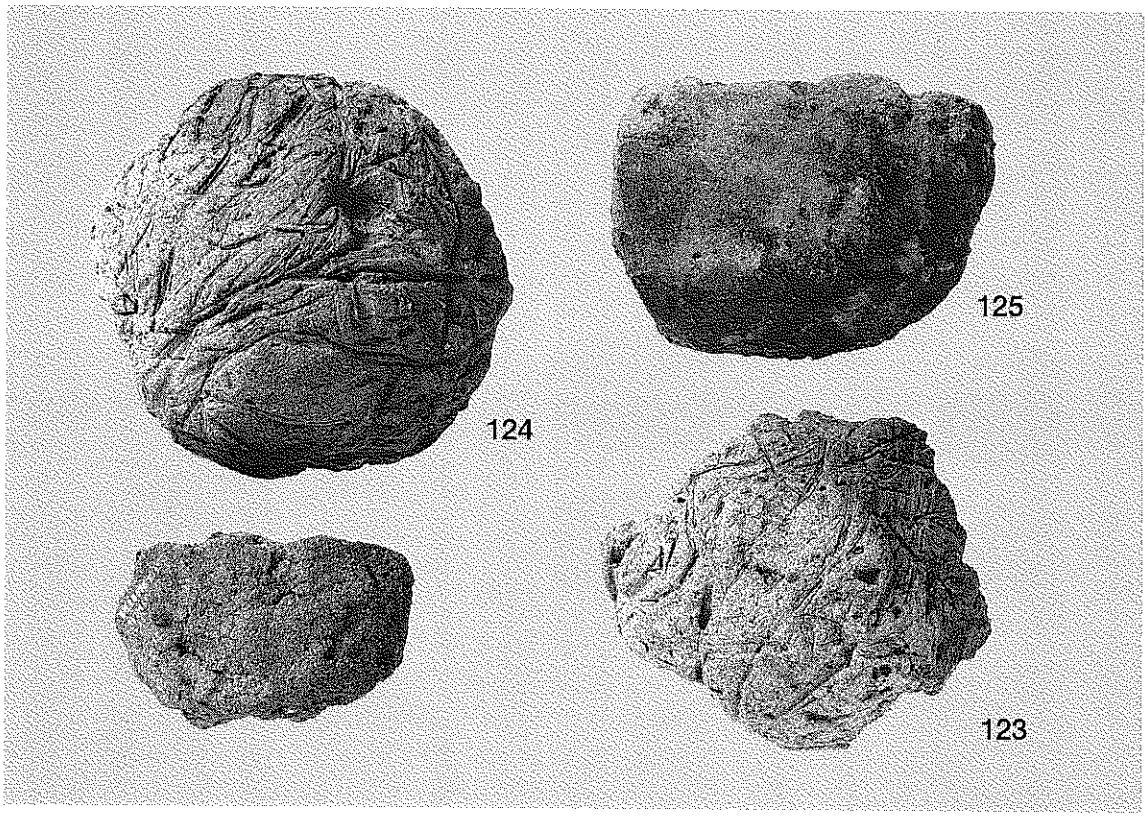
方形土製品（第52・54図126～132）　長方体でレンガ状の道具を方形土製品と呼称する。表面に塊状の溶鉄が付着し、二次焼成を受けている点が特徴である。溶鉄は概ね長側面の２～３面と小口に付着しており、どの個体も全く溶鉄が及ばない面を１面もつ。この面が何か



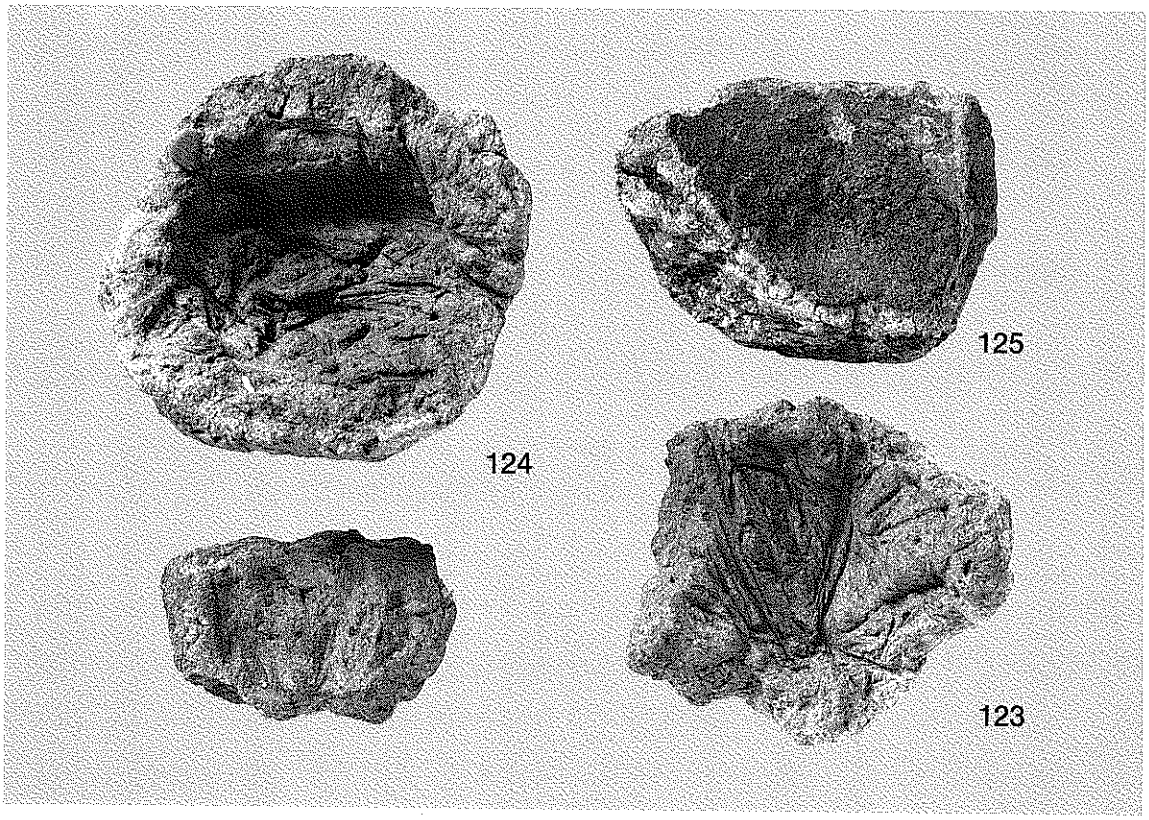
第48図　きのこ形土製品



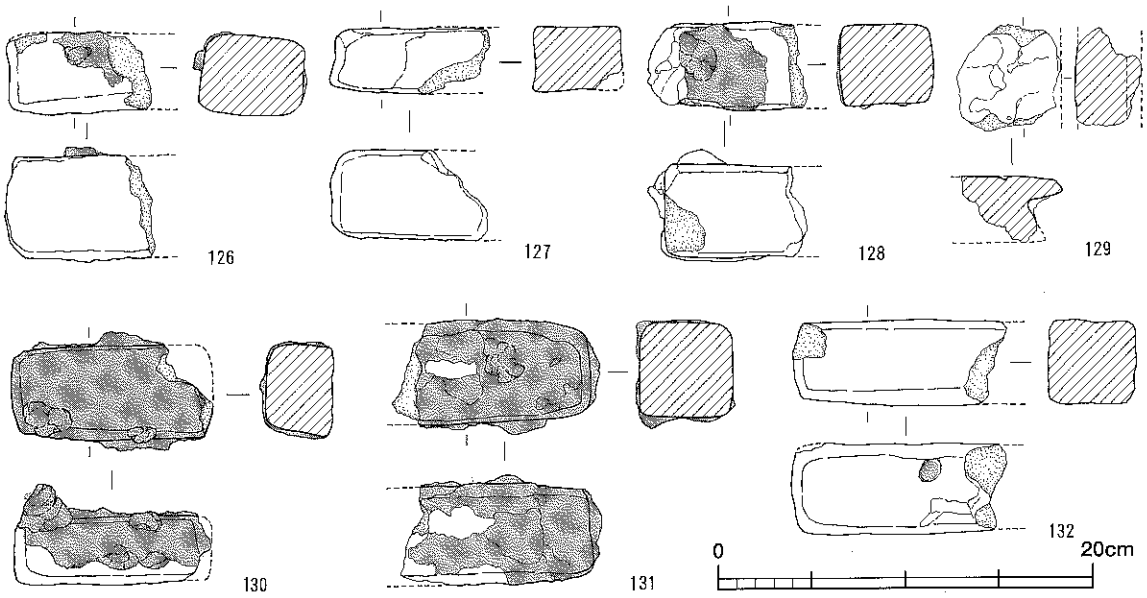
第49図　三叉形土製品



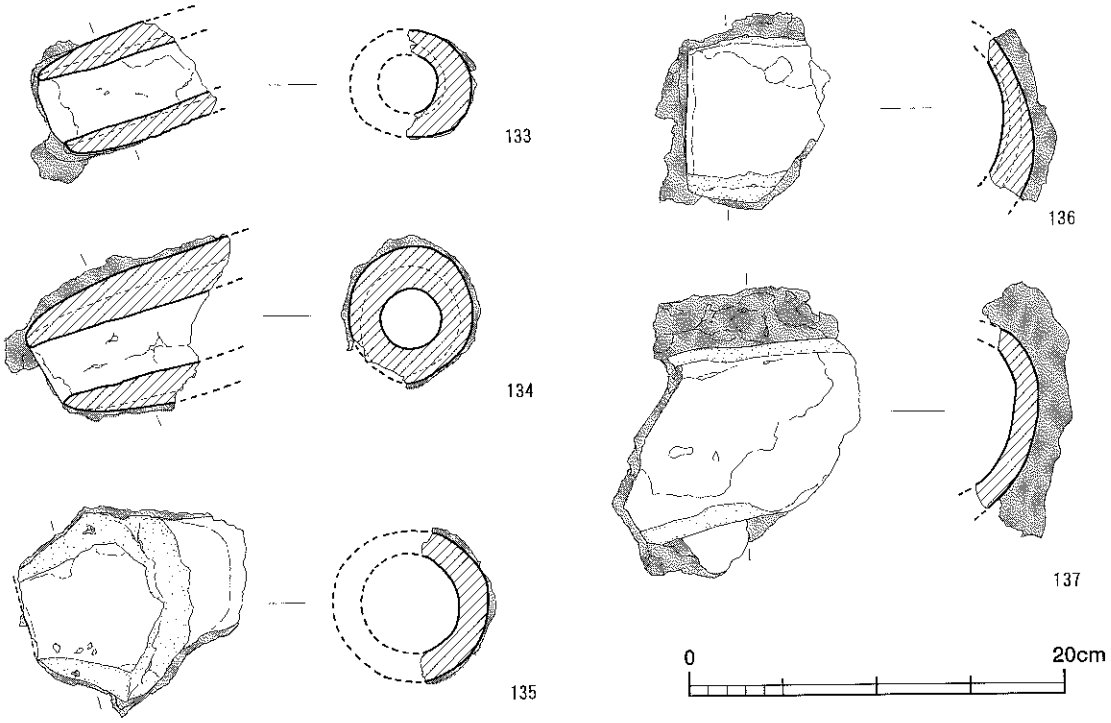
第50図　半球形土製品・取瓶１



第51図　半球形土製品・取瓶２



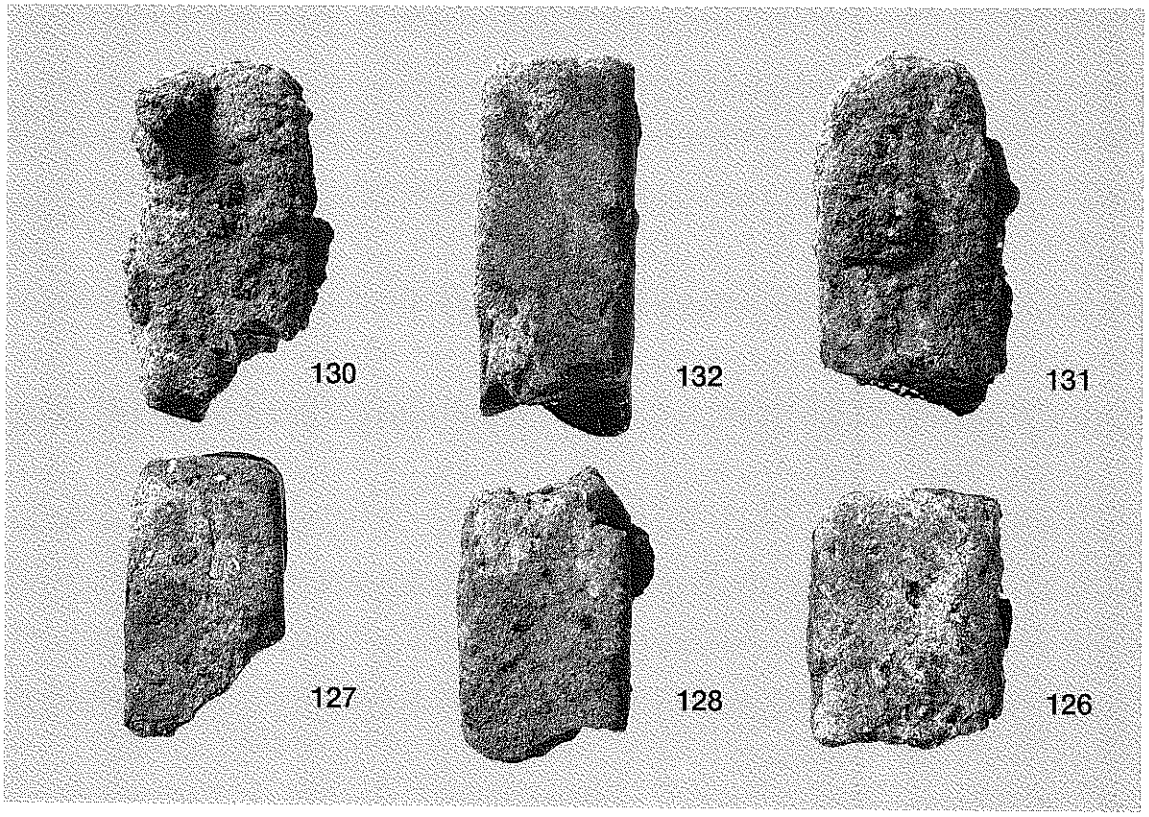
第52図　方形土製品実測図（アミ部分は溶鉄）



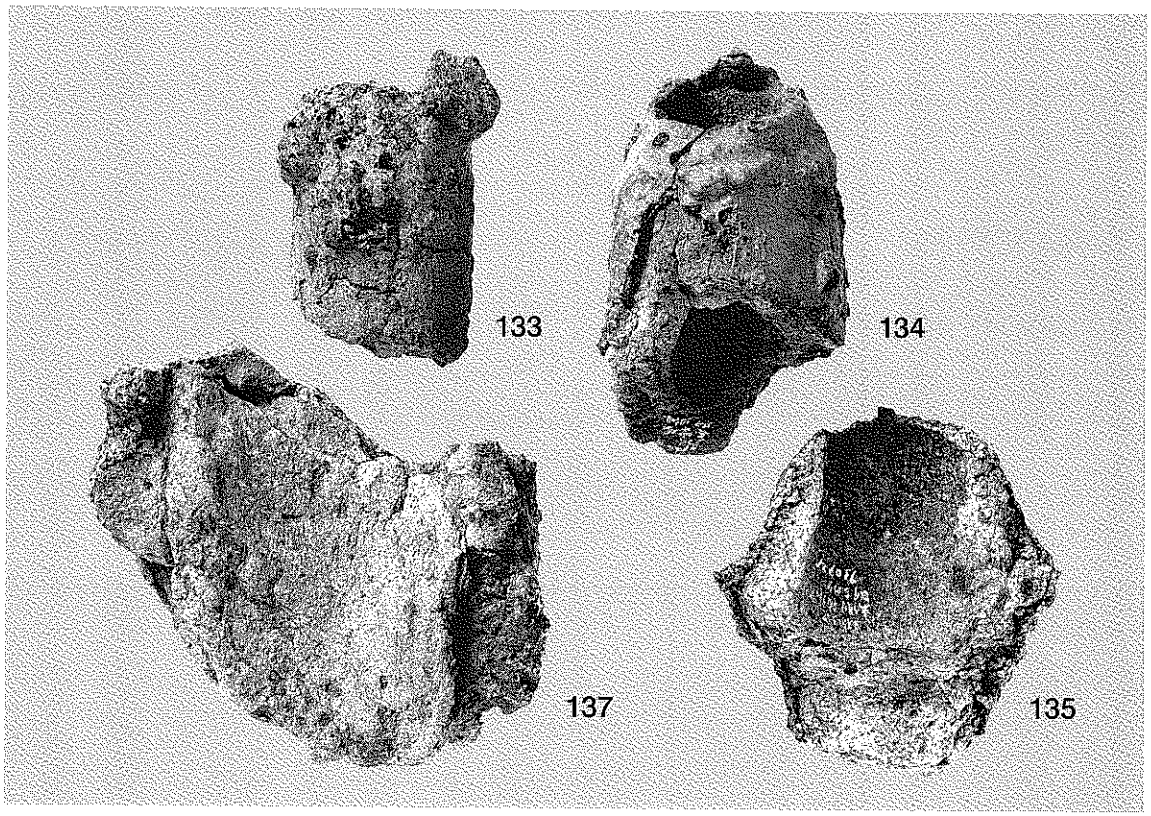
第53図　フイゴ羽口実測図（アミ部分は溶鉄）

で覆われていたような痕跡を持つ個体もある。具体的用途は不明であるが、溶解から鋳込み過程の間に、それぞれ単体で使用されたものである可能性が高い。また、断面形状が正方形と長方形のものがあるが、それ以外の特徴は共通するため、両者は同用途と考えられる。

フイゴ羽口（第53・55図133～137）　フイゴ羽口が計８片ある。概ね直径10㎝以上の大型品と８㎝以下の小型品に分類できる。大型品は４片あり、器壁が薄く溶鉄付着層が厚いことが特徴である。136・137はいずれも炉内部に突出した部分である。このほかに炉本体と接合



第54図　方形土製品

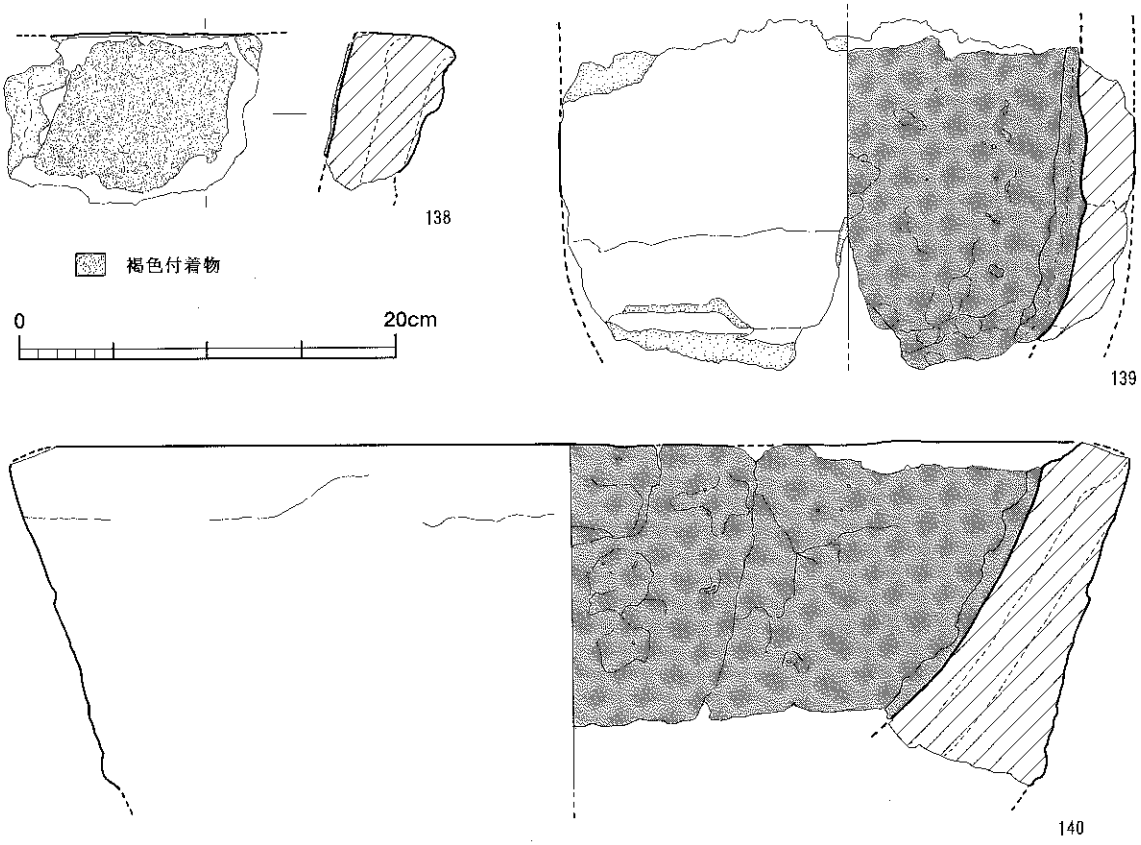


第55図　フイゴ羽口

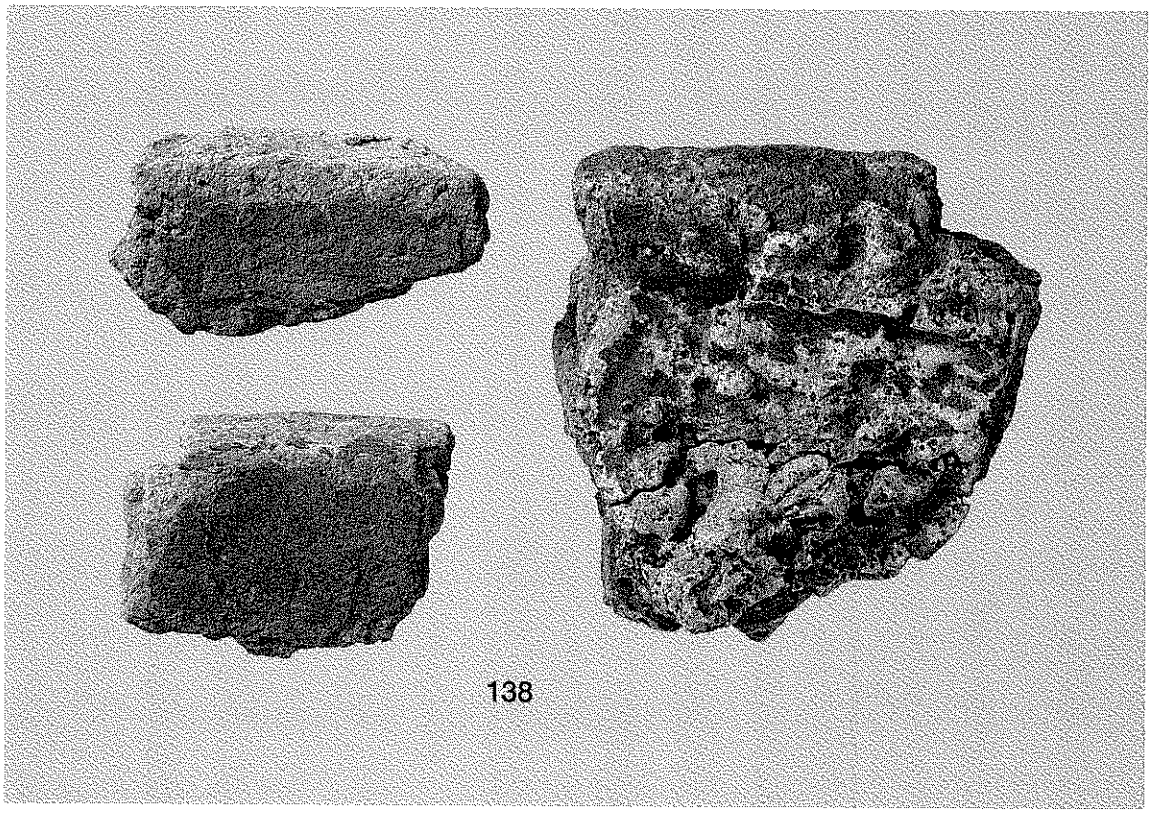
する部分であり、分厚い補充粘土が残る個体がある。小型品は４片あり、器壁が厚く溶鉄付着層が薄いことが特徴である。形状にはほぼ円筒形のもの（133・134）と円錐形のもの（135）がある。これらはそれぞれ法量や形状が異るため６～８個体分であるとみられ、基本的には溶解炉の容量に応じて使い分けられていたと考えられる。

溶解炉（第56～59図138～140）　溶解炉片はコンテナに約10箱以上ある。法量の異なる数個体分が含まれている。いずれも構造を復元することは困難であるが、少なくとも３部品以上から構成されるとみられる。民俗例をみれば燃料投入口、燃焼部、湯溜め（炉底）の３部品からなる可能性が高いが、法量によって異なる可能性もある。138は燃焼部の一部とみられる壁体で、内面には褐色の付着物が認められる。付着物の成分には鉄分などを含むとみられる。端部には剝離痕がありさらに上部構造があることがわかる。他に燃焼部の可能性があるものとして、直径40cm前後を測る内面が白色固化した状態の壁体がある。139・140は炉底片でありそれぞれ直径約30cm、45cmを測る。いずれも内面にガラス化した溶鉄が付着している。いずれも外面調整は簡単なナデ程度で、比較的凹凸がそのまま残る。また、地面に直接設置されていた口径50cmの炉底が１基あり、ウレタン樹脂で取り上げ保管している。

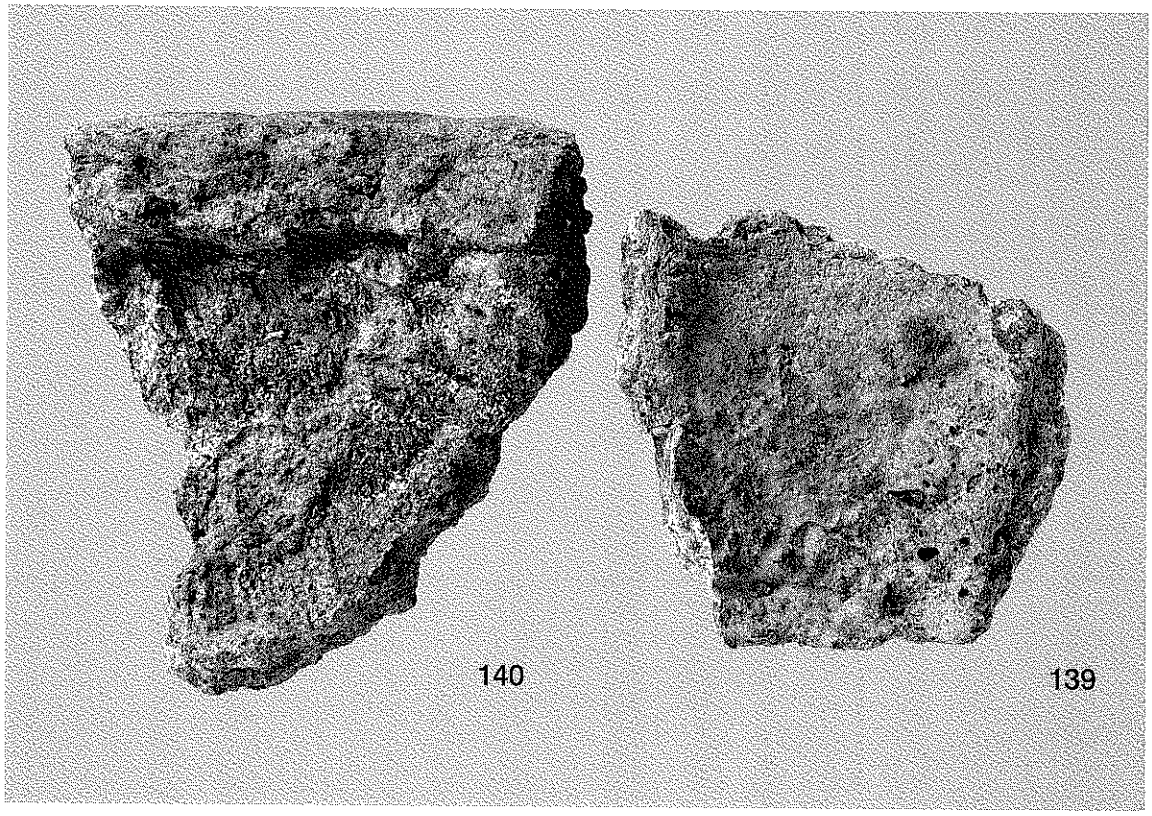
鉄　滓（第60図）　滓についてはほとんど整理や分析を行えていない。表面観察上はほぼ鉄滓で占められる。明らかな銅滓は認められないものの、存在をまったくは否定できない。



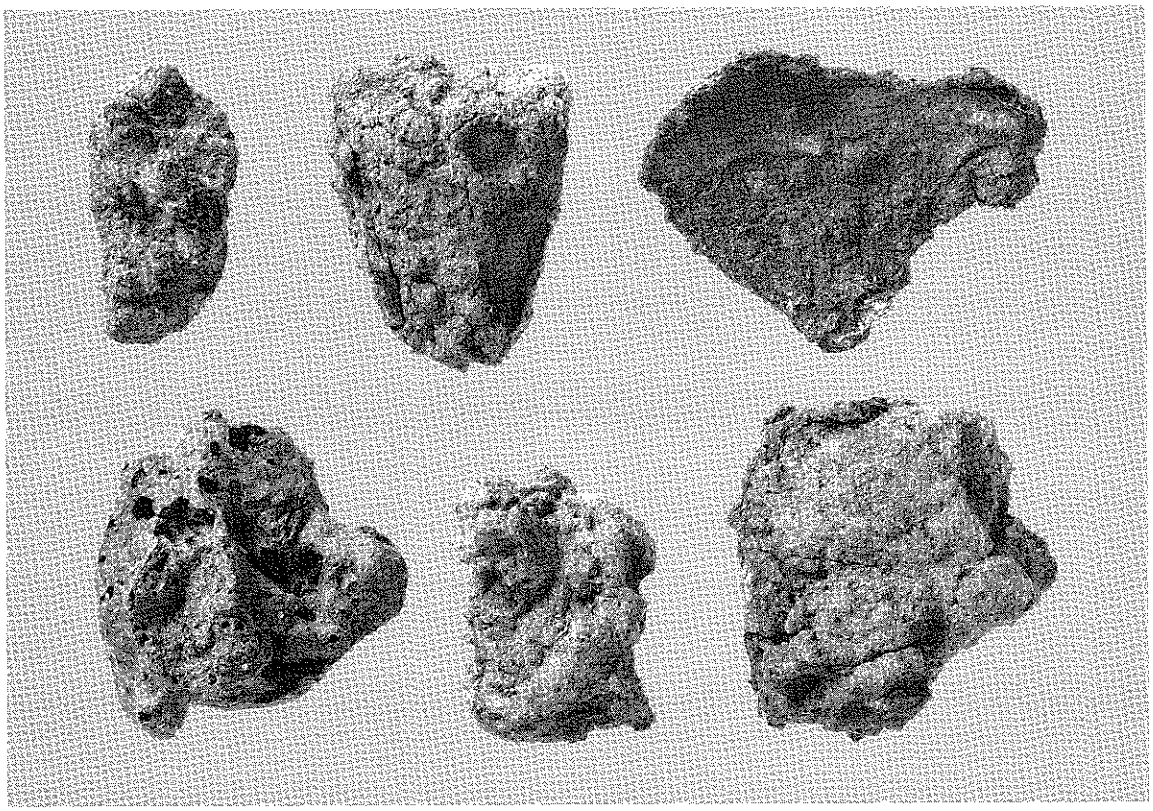
第56図　炉壁実測図



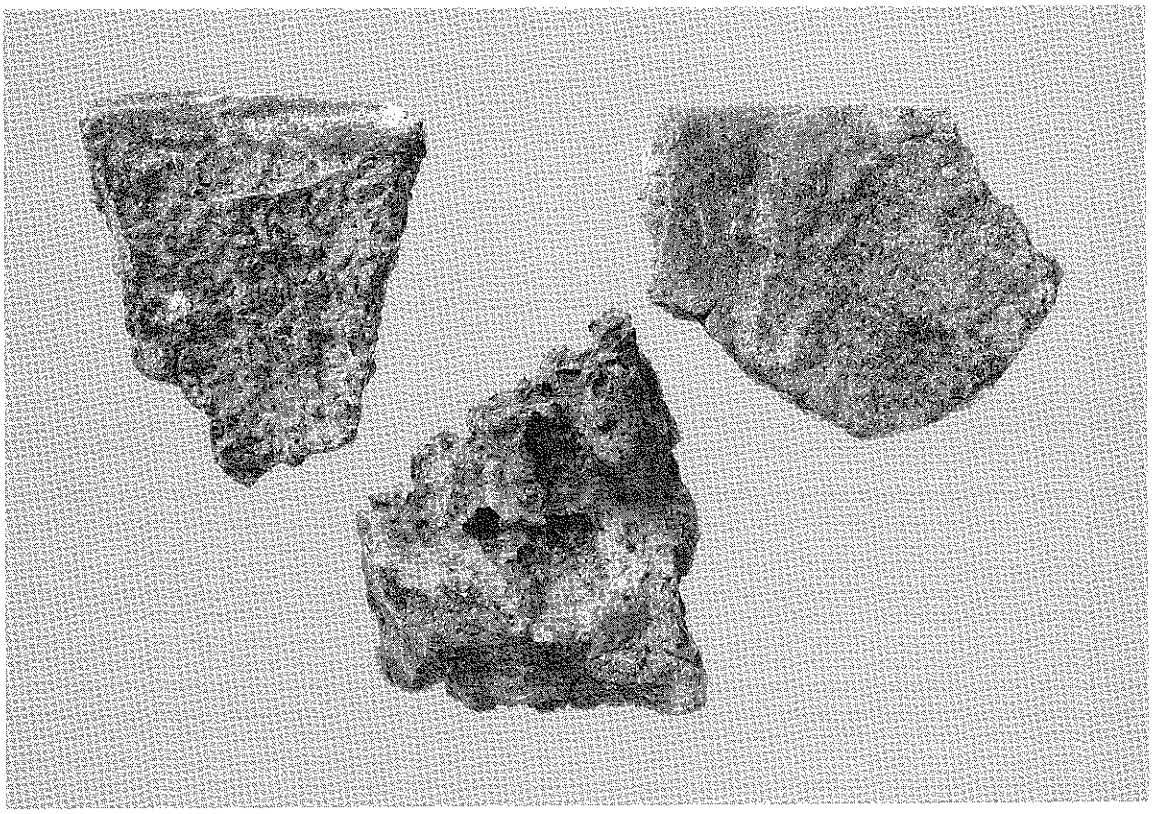
第57図　炉壁 1



第58図　炉壁 2



第59図　炉壁３



第60図　鉄　滓

4．まとめ

A．古墳～奈良時代の遺構

今回の調査では、古墳時代から中世に至る遺構・遺物を検出した。古墳時代から奈良時代の遺構については、遺構の性格は明確にし得ないものの、東に隣接する第１次調査地からの集落域の広がりと見てよいだろう。ただ、古墳時代後期については、第１次調査では当該期の集落は確認されておらず、古墳のみの確認であったことと、馬形埴輪の破片の出土から、古墳群が第１次調査地の西にも広がりを見せているものと考えた方がよいものと思われる。

B．中世の鋳造工房

今回の調査で特筆されるものは、やはり13世紀後半から14世紀前半の鋳造遺構の検出であろう。出土した鉄滓や炉壁の量から推測すると、小規模な出吹きとは考えられず、一定期間大規模に鋳造を行っていた工房跡と考えられる。鋳型から判断される鋳造品は、鍋・釜が主体となるものだが、磬のような仏具の生産も行っており、多様な製品を生産していた可能性がある。また、遺構の項で想定したブロックごとの作業内容の違いが正しいとするならば、鋳造が実に体系的に行われていたということができよう。これはまさに工房と呼ぶべきものと評価することができる。

もう一つ注目すべき点は、本調査地と東側の第１次調査地、そして西側の大久保環濠集落との関係である。６ｍ道路を隔てたのみの第１次調査地では、中世の遺構は溝１条しか検出していない。このことから本調査地と第１次調査地との間には、何らかの区画が存在し、その区画の中で鋳造が行われていたことになる。西側の大久保環濠集落については、これまで考古学的な調査は行われておらず、本当に環濠集落なのかは確認されていない。しかし、『宇治市史』の環濠の復元が正しいとするならば、環濠の外側にさらに帯状の別の区画をつくり、そこに鋳造工房を営んだことになる。このような集落構造を見たとき、鋳造工房が大久保環濠集落との密接な関連のもとに成立していることが理解できる。

調査地北西にある旦椋神社境内で行った第２次調査では、地表下1.5ｍのところに土師器の細片が散乱する面があり、この面が神社に関連する層と考えられた。ここから出土する土師器は、概ね13世紀から16世紀に至るもので、旦椋神社の前身である栗隈天神社の成立が13世紀代である可能性を示唆している。つまり鋳造工房の成立は、栗隈天神社の成立と大きく時を隔てない時期であったことがわかる。中世集落における神社は、村の中核をになうものであり、神社の成立と鋳造工房の成立が時を同じくするということは、大久保地域の変遷の中で13世紀代が重要な変革の時期であったことを窺わせる。

また、『山城名勝志』によれば、現在の京田辺市松井にかつてあった成願寺の梵鐘に、「文保三年巳未卯月八日　沙彌十念敬白　願主比丘尼法阿闍梨　眞慶　僧西念　大工伊勢田爲

依」の銘があったとされており、大久保の隣村である伊勢田でも鋳物師が居住し、梵鐘の鋳造を行っていた可能性がある。時期も旦椋遺跡の鋳造工房とほぼ同時期であり、注目される。しかし大久保・伊勢田のいずれの集落においても、中世以降鋳造を継続していた痕跡は認められず、文献や伝承なども全く残っていない。

鋳造を行うためには、鉄・炭・鋳物砂などの大量の資材が必要とされる。これらの資材を準備するには相当な経済力が必要と思われるが、この時期の大久保周辺の状況を伝える文献等は知られておらず、旦椋遺跡の鋳造工房がどの様な背景の中で成立したかは明らかにできない。今後の検討課題である。

(註)

(1)「旦椋遺跡第２次発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第20集　宇治市教育委員会　1993

(2) 花前Ⅱ遺跡（『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』財団法人千葉県文化財センター1985)、軽野正境遺跡（『軽野正境遺跡発掘調査報告書』秦荘町教育委員会1979)、などで類似品の報告がある。

(3) 森容子・吉田晶子他「三俣の鳴り物作り」『近江の鋳物師』Ⅱ　滋賀県教育委員会　1987

(4)『軽野正境遺跡発掘調査報告書』　秦荘町教育委員会　1979

(5)『倉吉の鋳物師』倉吉市教育委員会　1986

報告書抄録

ふりがな	
書　　名	
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	第25集
編著者名	荒川　史・吹田直子
編集機関	宇治市教育委員会
所 在 地	〒611－8501　京都府宇治市宇治琵琶33番地　0774－22－3141
発行年月日	西暦1994年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
丸山古墳（まるやまこふん）	京都府宇治市宇治琵琶16（キョウトフウジシ ウジビワ）	26204	11	34度52分50秒	135度48分6秒	19930414～19930416	78	共同住宅建設
野神遺跡（のがみいせき）	京都府宇治市宇治野神66（キョウトフウジシ ウジノガミ）	26204	88	34度52分40秒	135度47分48秒	19931129～19940104	300	社員寮建設
金草原遺跡（かなくさはらいせき）	京都府宇治市木幡金草原16－1（キョウトフウジシ コハタカナクサハラ）	26204	25	34度55分21秒	135度48分24秒	19931206～19931228	200	共同住宅建設
矢落遺跡（やおちいせき）	京都府宇治市宇治矢落14（キョウトフウジシ ウジヤオチ）	26204	79	34度53分13秒	135度47分48秒	19940124～19940311	324	共同住宅建設
旦椋遺跡（あさくらいせき）	京都府宇治市大久保町山ノ内3－1（キョウトフウジシ オオクボマチヤマノウチ）	26204		34度52分4秒	135度46分36秒	19930830～19931111	430	診療所建設

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丸山古墳	古墳	古墳	無し	無し	
野神遺跡	散布地	中世	溝・土壙墓	鉄刀	
金草原遺跡	散布地	古墳	無し	土師器	
矢落遺跡	散布地	平安・近世	耕作溝	近世陶器・瓦	
旦椋遺跡	集落	古墳～中世	溝・土壙・鋳造遺構	須恵器・土師器・瓦器・土製品・鋳型・鋳造炉・鉄滓	

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第25集

平成６年３月31日

編集・発行　宇治市教育委員会
〒611-8501　京都府宇治市宇治琵琶33番地

製　　作　河北印刷株式会社